帝國實業讀本

改制新版

卷二

42531
教科書文庫
4
810
44-1941
~~20000~~
~~41403~~
2000302973
1941

資料室
375.9
Ho7

教科書文庫
4
810
44-1941
2000302773

文部省檢定濟
昭和十六年十月三日 實業學校國語科

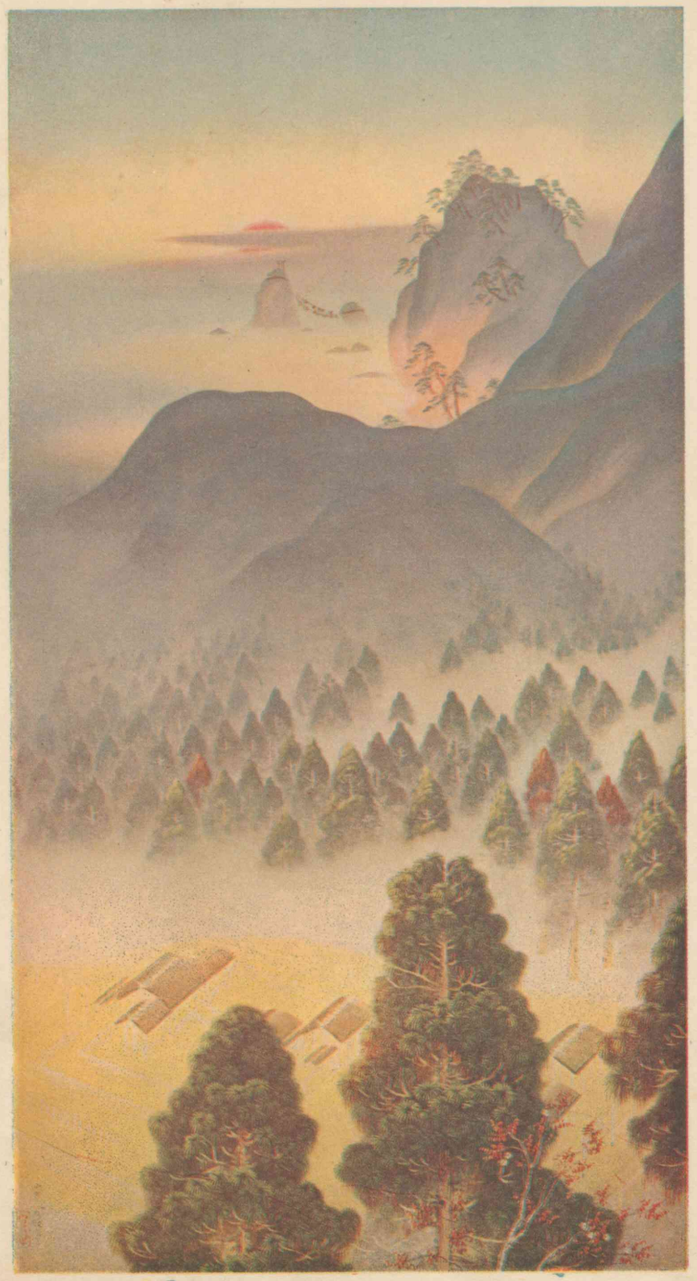
帝國實業讀本

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

改制新版

中等學校教科書株式會社

広島大学図書
2000302773



神路山　岩田豐麿筆

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
41403
書
図

帝國實業讀本 改制新版 卷二

目次

一 惠まれた國土……清原貞雄…一
二 月雪花……六
三 美しい日本(詩)……山村暮鳥…一二
四 感謝の生活……三浦修吾…一六
五 發明王エヂソン……澤田謙…二四
たつた一歩(自修文)……澤田謙…三三
六 木曾川の渡守その一……吉田絃二郎…四六
七 木曾川の渡守その二……吉田絃二郎…五四
八 小さい旅人……薄田泣菫…六〇

九　雁(詩)……千家元麿…六八
一〇　灌漑……(遺老物語)…七〇
一一　多年一日の修養……村上專精…七四
一二　大石良雄その一……山路愛山…八二
一三　大石良雄その二……山路愛山…八九
名人同志(自修文)……中内蝶二…九六
一四　多摩御陵に詣でて……一〇三
一五　日の丸の歌(詩)……西條八十…一一〇
一六　新年……一一二
一七　五十鈴の流……河野省三…一一六
一八　たのしみは(歌)……橘曙覽…一二六
一九　勞苦と快樂……小酒井不木…一二八
イギリス富豪の犧牲心(自修文)……新渡戸稲造…一三九

二〇　フレデリック大王と酒井備後守……幣原坦…一四四
二一　人を恐るな天を恐れよ……大町桂月…一四九
二二　地獄極樂……塚原澁柿園…一五四
二三　春は來ぬ(詩)……島崎藤村…一五六
二四　伸びて行く力……小林一郎…一五九

廣島大學圖書之印

帝國實業讀本 改制新版 卷二

一 惠まれた國土

清原貞雄[一]

(一)歴史家、文學博士。廣島文理科大學教授。明治十八年(一八五四五年)大分縣に生れた。

我が國は昔から豐葦原瑞穗國と呼ばれてゐる通り、地味が肥沃で、五穀が豐かに稔り、その上、位置が人類の棲息するに最も適當な緯度に當つてゐる。隨つて春夏秋冬の氣候の變化が適度に行はれ、盛夏と雖も華氏の九十度を超える事は少く、嚴冬と雖も華氏三十度を下る事は多くない。溫暖な春と、爽涼な秋とが比較的長く、春は櫻花をはじめ百花が爛漫として野山を飾り、禽鳥が到る所に聲を合せて囀る。秋は

緯度

紅葉の錦が燦爛として山溪に輝き、鳴く蟲が千草の中で妙なる音樂を奏でる。その他、夏の夕べのそゞろ歩き、冬の朝の雪の眺もまたなく樂しく美しい。

我が國は海上に點在する島國である。隨つて茫々千里に亙る大平原はない。いづこを涯とわからぬやうな大森林もない。程よい大きさの山川平野が到る所にあり、海岸線も概して出入が多く、海上には所々に小島が點在して、風情を添へてゐる。げに我が國土は、此所に住む國民に取つては、恐るべき神祕でなくて、愛すべき自然である。

我が本土は列島の上に國を成してゐる關係上、大陸の一部に居を占めてゐる國々の民が屢遭遇するやうに、他の强大國から壓迫される機會は、古來極めて稀であつた。兇暴な他民族に蹂躙され、掠奪され、一地または一國を擧げて焦土にされるといふやうな悲慘な運命に遭遇した事は、肇國以來唯の一度もない。これ固より我が皇室の御稜威によつて、國家が常に健全であり、國民が武勇を尙んで、我が國を窺ふ者があつても、一擧にこれを擊退する事が出來たからでもあるが、また一つには、我が國が地理的位置に惠まれてゐたからだとも言へよう。

若し我が國がもつと遠い大洋の中に孤立してゐたならば、どうであつたらうか。よし他國の侵略は免れる事が出來たとしても、文化の進歩は望む事が出來なかつたであらう

綜合大成

神國

過剩狹隘

然るに我が國は他國の文化と全くかけ離れる程、遠く孤立してはゐないのみならず、海上の交通が夙に發達した結果、古來大陸との交渉も絶えず行はれ、爲に大陸に發達した文化は悉くこれを輸入し、吸收して、その進歩に資する事が出來た。かくて我が國は遂に東洋文化の綜合者、大成者たる光榮をさへも擔ふに至つたのである。

誠に我が敷島の大和國は、最も惠まれた國土である。我が國は神の深き思召によつて作られ守られてゐる國であるといふ自信、卽ちいはゆる「神國」であるといふ信念を、我が國民が古くから抱いてゐるのは、決して理由のない事ではない。唯今日に於て、人口過剩の結果、國土の狹隘を感じ、物資の

不足を告ぐるに至つたのは、國家として大いに考へなければならない事である。今後の我が國民は、積極的には農産物の增收並びに工業の發達を圖り、且海外貿易の發展を企て、消極的には正しき節約を行ひ、無益の費を省く事によつて物資の不足を補ひ、以てせつかく惠まれた自然の樂土を擁護し、益々その樂土たる特質を發揮せしめるやうに努めねばならぬ。

(一)あめのした國はおほけどかむろぎのうみなしませる大八洲國

——提要日出づる國——

(一)本居宣長の歌。

雅興
俚歌

二　月雪花

春はハナミ、夏はスヾミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼はまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。「お月樣いくつ」の俚歌、「雪よふれ〳〵」の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみ込んでゐるのである。

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐土人も高麗人も美しいと言ふに違

徑庭

詩的教育

塵世を忘れる

隱遁者

皎々たる明月

皚々たる白雪

利慾に營々たり

ないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところとには、大きな徑庭がある。西洋人は觀月といふ事に關しては、殆ど何の興味をもつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育された。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

風流の眞義は塵世を忘れる事である。全く塵世を忘れて活動社會を離れる事は隱遁者の所行であるが、少くとも皎皎たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の效用は美術と同じく、人を高尚にし、人を溫雅にするのである。

蹉跌　吟詠　譬喩　有情化　有徳化　光風霽月　君子人　邪佞の徒　なぞらふ　氷潔

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。「月に叢雲、花に風」月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひてゐる。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々な美徳を附加する。無情な物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のない物として、光風霽月などと熟語されて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲はその光明を掩ふ物として、小人邪佞の徒になぞらへられる。また雪は氷潔一點の塵のない事から、冷たい嚴肅な所を見て、潔白な精神や節操の動かない事を聯想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を擲つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の徳を備へてゐるやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つたそのまゝを我等は承繼いで、我等もさう感ずるのである。

月雪花を觀賞し得る我等は幸福である。盲人の學者保己一の逸事として傳はつてゐる話に、或時月に對して、

花ならば探りても見んけふの月

と言つた。また京都に上つた時、御所の南殿の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

(一)江戸時代の國學者。塙氏。通稱辰之輔。武藏の人。(一二四八年―一六七六年)

逸事

(二)紫宸殿のこと。

と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも
なか〳〵よしや雪のふじのね

と言つた。

月雪花の眺を恣にする事の出來ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加された傳説を有しない民族もまた人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知る事か出來る。月雪花を通じて、我が國民の歴史は彷彿として眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

品性

心眼

今や我が國は世界の日本となつた。我等の足跡は世界の上に普く印せられねばならぬ。猿澤の池、(一)にほの海の上に照る月ばかりではなく、太平洋、印度洋の月をも眺める事があらう。(二)エジプトの金字塔下、支那の萬里の長城の月さてはア(三)ルプス山の高峯の雪に攀づる事もあらう。(四)シベリヤの吹雪に逢ふ事もあらう。滿洲の野にも日本の櫻は移し植ゑられるし、(五)ワシントンの公園にも、春ともなれば年毎に櫻の花が美しく匂ふ。新時代には多くの新名所が起らねばならぬ。後人をして俯仰感慨措く能はざらしめる佳話と文學とは、必ず多く新時代の人によつて遺されるであらうと思ふ。

(一)鳰の海。琵琶湖のこと。
(二)埃及。
(三)ヨーロッパの西南部に聳える山脈。最高峯モンブランは四八一〇メートル。
(四)西伯利亞。
(五)アメリカ合衆國の首府。同市の公園のポトマクには日本から寄贈された櫻の樹が植ゑてある。

三　美しい日本

山村暮鳥[一]

日本。うつくしい國だ。
あしの葉つばの朝露がぽたりと
おちてこぼれてひとしづく、
それがこの國となつたのだとでも
いひたいやうな日本。
大海の上に浮いてゐる
かはいらしい日本。
うつくしい日本。
小さな國だ。
小さいけれど、
その精神は鋼鐵（はがね）のやうな強さである。

[一] 詩人。本姓名は土田八九十。群馬縣の人。大正十三年歿、四十三。

あゝ日本。
ぴち〳〵してゐる魚のやうな國。
勇敢な日本。
古い日本。
その霧深い中にとぢこもつて、
山鳥の尾のなが〳〵しい夢を見てゐたのも、
今はもうむかしのことだ。
目をあけて、
そこにどんな世界をお前は見たか。

日本。日本。
お前のことをおもふと、

この胸が一ぱいになる。
お前は希望にかゞやいてゐる。
お前は力にみち〳〵てゐる。
そして眞劍だ。

だが日本よ、
お前の道はこれまでのやうに
もうあんな平坦なものではあるまい。
お前はよるひる絶えず
お前のまはりに打寄せてゐる
その波の音をなんときいてゐるか。

おゝ孤獨な

黎明の天空

遠い一つの星のやうな日本。
からりと晴れた黎明の天空のやうな國。
とき〳〵は通雲の
さつとかゝるくらゐのことはあつても、
お前はたゞの一度でも、
その顏面に泥をぬられたことがないんだ、
そんなうつくしい國なんだ。

日本。
幸福な日本。
強い日本。
わたしはこゝで生れたんだ。
墳墓の地だ。

墳墓の地

靜かな國日本。
小さい國日本。
つよくあれ。
すこやかであれ。
驕るな。
日本よ、眞實であれ。
ばかにされるな。

四　感謝の生活

三浦修吾[一]

京都の或友人から聞いた、秋田の山の中の百姓爺さんの話である。その友人が爺さんに向つて、

「お爺さん、お前死んだら何になる」。

[一] 教育家。福岡縣の人。大正九年歿、年四十五。

素朴信念

と聞いた。

「死んだら土になるのだ」。

爺さんはかう答へた。爺さんの答はきつぱりとしてゐた。

「當前だよ、わかつてゐるではないか」といふやうな調子を帶びてゐた。友人はこれに對して何とも言ふ事が出來なかつた。「あの爺さんには、ほんとにいつも參らせられるのです」と、友人は私に言つた。

この爺さんの言葉が、私には實に味はひ深く聞かれる。「死んだら土になるのだ」。この素朴な力强い一語に、爺さんの信念と、希望と、そして安心とが、鳴響いてゐるやうに聞かれる。爺さんは、この一語以上には何も言ひ得ないであらう。けれ

事功を擧げる

ども、爺さんのこの一語には、言盡せぬ程の深い意味があると私は感じてゐる。

試に考へてみよう。私どもの口から、「死んだら土になるのだ」といふ聲が出たとしたら、それはどんなに情ない絶望的な響であるだらう。「この世は短い。この世では自分の望は遂げられない。この世はつらい事ばかりである。たま〳〵面白い事があるにしても、それはちよつとの間である。名を成したところで、事功を擧げたところで、自分はやがて死なねばならない。死んだらどうなる。土になるばかりだ。あの冷たい土に」。かうした心持の外には、この言葉を發し得ないであらう。

復活する

たどる（辿）

然るに、この爺さんの聲は、「死ねば極樂に往生する。天國に復活して神と共に限りない幸福の生活に入る事が出來る。其所にはもう悲しみはないのだ。苦しみもないのだ」と信じて、未來の生活を希望して、安心してゐる信仰の人の言葉に等しい。否、それ以上どことなく底力のある強い信念が籠つてゐる。

私は、秋田の山の中の百姓爺さんの心中にたどり入つて考へてみた。「死んだら土になるのだ」。この一語に爺さんは、胸一杯、腹一杯の喜を籠めてゐるやうに私には感じられる。爺さんは小さい時から百姓をして、土に親しんで來たのである。四十年も五十年も、毎日々々土に親しみ、土に接觸して來

無機物

た爺さんに取つて、土は死物ではない。無機物ではない。爺さんの眼には、土は活きて見える。爺さんの爲には、土は長い間友だちであり、兄弟であり、親である。否、否、土は爺さんの爲には神である。土といふ神である。

爺さんは毎朝早く起きて、跣足で地上に立つ。土が足の裏に觸れる。ぢり〳〵と土の氣が足の裏から爺さんの血管に傳はつて行く。爺さんの身體が暖かくなる。爺さんの腹が滿ち、胸が開け、頭がさわやかになり、爺さんの顏が輝いて來、爺さんの腕に力がうなつて來る。爺さんは鍬を持つて畑の土の中に足を入れる。土は爺さんの鍬に隨つて、爺さんの心のまゝに動く。ころがる。くつがへる。

蕃殖する

爺さんの胸中には感謝の念が涌いて來る。あゝ、有難い事だ。かうして芋種を植ゑ、大根の種を蒔いて置くと、雨が降つては土を濕してくれる。日光が照つては溫りを與へてくれる。そして芋の子が蕃殖するのだ。大根が大きくなるのだ。かうして麥も出來るのだ。自分がかうして土の中に立つて鍬を執つて耕してやり、肥料を掛けてやると、土が喜んでそれを吸取つてくれて、そして芋や、大根や、米や、麥を育てゝくれるのだ。自分たちはその芋や、大根や、米や、麥を食べて、かうして生きてゐる事が出來るのだ。あゝ、人間は皆土のお蔭で生きてゐるのだ。土がなかつたら、自分たち人間は死んでしまはなければならないのだ。

報酬

さうだ、林檎が見事に熟した。あのぼうつと夜明方の空の色のやうな、あの赤い黄色い色。何といふ美しい色であらう。そして、あの甘いやうな、酸つぱいやうな味。人間の手であんな結構な味が出來ると思ふか。都の人がどんなに骨を折り、工夫をして、旨い菓子や料理をこしらへると言つても、あの林檎の味に勝る物をこしらへる事が出來るものか。日本一、いや〳〵世界一の料理の名人だつて、林檎の味程の物をこしらへる事が出來るものか。それは、みんな土が育て上げてくれるのだ。自分は一生土の相手になつて、土の仕事を手傳つて來たのだ。その報酬に、土が自分にこの旨い物を食はしてくれるのだ。自分は山の中の貧乏者でも、土のお蔭で、土の

助勢

助勢をしたお蔭で、都の金持と同じやうに、旨い物を口にする事が出來るのだ。いや、恐多い事だが、天子樣と御同樣、この旨い物を口にする事が出來るのだ。有難い事だ。

爺さんは鍬の手を止めて、腰を伸しながらあたりを見廻すと、朝の露に濕つた土が、朝日の光を受けてきら〳〵と輝いてゐる。爺さんの胸には益〻感謝と報恩との念が涌く。爺さんは天地の恩惠の輝きの中に立つてゐるのだ。

この一生を、鍬を執つて土の中に立つて過して來た。長い事であつた。自分ももうやがて死ぬのだ。死んだら何になる。土になるのだ。芋や、大根や、米や、麥や、林檎を育てるのだ。そして子孫や世間の人たちを養ふのだ。この皺くちやに干から

蔬菜

びた自分の五體が、死ねばあの土になつて、五穀蔬菜を育て上げるのだ。そして人の命の糧をこしらへてやるのだ。土になれたら子孫も養へる。天道樣に御恩返も出來るのだ。

「死んだら何になる」。

「知れてゐるではないか。あの土になるのだよ。あの有難い土樣、土といふ神樣になるのだよ」。

——林檎の味——

五　發明王エヂソン

澤田謙(一)

「天才とは、一パーセントの靈感と、九十九パーセントの流汗とで出來るものである」。

二十世紀の大天才と言はれたエヂソン(二)の言葉である。そ

(一)評論家、傳記作者。明治二十七年(一八九四)鳥取縣に生れた。

(二)アメリカの科學者、發明家。(西紀一八四七年—一九三一年)

獨學

もらふ(貰)

(一)亞米利加。

してその通り、彼は自分の汗によつて、あの大發明を成遂げたのだ。

彼は學校では低能兒と言はれた。だから小學校へは、二三箇月しか行つてゐない。あとは皆、血のにじむやうな獨學である。少年時代から、新聞賣子をしながら儲けた僅かの金で藥品を買ひ、穴藏の中でこつ〳〵勉强をし、また實驗をした。

エヂソン

青年時代には、電信技手になつてアメリカ(一)の方々の地方を歩いたが、その間も彼は非常な勉强家であつた。月給をもらふとすぐ古本屋へ行つて、澤山の書物や雜誌を買込み、夜

おそくまで讀耽つた。夜は二時間か三時間しか眠らぬ日も多かつた。朝になると、がばとはね起きて、

「人生は短い。だのにわたしには、こんなに澤山しなければならぬ事があるのだ。」

と、まだ眠つてゐる朝の街を、一目散に朝飯を食べに走つて行くのが常であつた。

一目散に

エヂソンは一生の間に電燈、電話、電車、蓄音機、活動寫眞機、發電機、蓄電池など、多くの重要な發明をした。特許を取つた物だけでも、二千以上にのぼつてゐる。我々は二十世紀を文明世界と呼んでゐる。けれども、別に釋迦以上の大宗教家が現れ、(一)シェークスピア以上の文豪が生れ、(二)カント以上の大哲

特許

(一)イギリスの文豪。(西紀一五六四年―一六一六年)
(二)ドイツの大哲學者。(西紀一七二四年―一八〇四年)

學者が出た譯ではない。唯前の時代と違ふのは、電燈が點り、電車が走り、蓄音機が鳴り、電話が通じ、自動車が人を運ぶだけの話である。しかも、これ等二十世紀のいはゆる「文明」が、殆ど全部たつた一人の人間――トーマス・エヂソンの發明であるとは、何と驚くべき事實ではないか。若しエヂソンが生れなかつたなら、現代は暗黑世界であつたかも知れぬ。

だから、世はエヂソンを呼んで天才だと言ふ。確かに彼は、現代の生んだ一大天才である。しかしその天才は、手を拱いて奇想の天外から落來るのを待つ天才ではなくて、實に粒粒辛苦、額に脂汗をにじませて働き取つた天才である。

手を拱く

奇想天外より落つ

彼程の大天才でも、あの大發明をする爲には、毎日四時間

しか眠らなかつた。一日に十八時間は働きづめだつた。だから彼の研究室には、夜も晝もなかつた。疲れると、その邊の書物を取つて枕にし、(一)テーブルの上にぐう〳〵鼾をかいた。そして目が覺めるといきなりはね起きて、

Table.

「さあ、仕事だ。」

かうして彼の大發明は出來たのであるさ程の才能もない癖に、のらりくらりとして不遇を歎いてゐる自稱天才は、面を伏せて恥ぢなくてはなるまい。

自稱天才

あの電燈の白熱線一つ作る爲にも、エヂソンは千六百種の金屬を試驗し、六千種の植物を炭化したといふ事である。

汗の結晶

エヂソンの二千有餘の發明は、その一つ〳〵が汗の結晶だ。たつた一つ蓄音機だけは、エヂソンが偶然思ひ附いた考から出發した物であつたが、それは唯一の例外であつて、あとは全部、實驗に實驗を積み、失敗に失敗を重ねた擧句、やつと成功した物である。だから、發明の祕訣を問はれた時に、エヂソンは無愛想に答へた、

偶然

擧句

「うんと考へて、うんと働くことだ。」

その精神が、少年時代の低能兒をして、世界の發明王たらしめたのである。

或時一人の助手が、あらゆる實驗に失敗して、すつかり悄氣かへつてゐると、エヂソンは肩を叩いて言つた、

悄氣かへる

「君、それを失敗だと思つてはいけないよ。僕はあらゆる實

驗を成功だと考へてゐる。現に君は、それ等の實驗によつて、非常に大切な事を發見してゐるではないか」。

「えつ、何をですか」。

「今までの實驗が間違つてゐたといふ事だ。ほんとの方法はそれ以外にあるといふ事だ。すばらしい發見ではないか。それだけ實驗の範圍は狹められてゐる。そしてそれだけ成功に近附いてゐるのだ」。

不屈不撓の大精神

この不屈不撓の大精神。それがエヂソンの發明の祕訣である。

文字通り

蓄電池の發明の時には、エヂソンは研究所の三百人の人人と一緒に、文字通り不眠不休の實驗を、ぶつ續けに十年間

好評殺到する

續けた。そしてやつと出來上つたのがE型の蓄電池である。それは果して好評であつた。方々から註文が殺到した。然るに暫くして、その蓄電池は成績甚だ優良であるけれども、時時電力の落ちる事があるといふ事がわかつた。何所かまだ不完全な所があるのだ。するとエヂソンは卽座に決心した、

卽座に

「殘念だが、本日限り工場を閉ぢよう。それは非常な損失であり、また大變な恥辱であるけれども、私は見す〳〵不完全とわかつてゐる物を、社會に廣める事は出來ぬ」。

そして一旦出來上つた蓄電池を棄てゝ、また同じやうに猛烈な研究と實驗とを始めた。かくして更に五年——遂に完成したのが、有名なA型蓄電池である。

「たつた一つの蓄電池に、三百人の人が不眠不休で十五年もかゝつたんですつて。それだけやれば、どんな凡人だつて發明出來るではありませんか」。

諸子はさう思ふであらう。さうだ。それが發明の祕訣であり、また天才たるの祕訣なのだ。天才とは努力する凡人である。

だから、エヂソンの親友である自動車王フォード[1]は言つてゐる、

「エヂソンは世界人類の爲に、二つの大きな功績を遺した。一つは言ふまでもなく、その二千有餘の大發明である。そしても一つは、かうすれば、どんな人だつて、きつと成功するといふ方法の實例を、世の青年の爲に遺した事である」。

それは獨り發明の事ばかりに限らない。社會のあらゆる方面に於て、大きな事業は、みんな大きな努力の結晶である。エヂソンの天才は、それが汗ににじんでゐるだけ、それだけ光り輝くのである。

(1)アメリカの大實業家。(西紀一八六三年—)

自修文

たつた一歩

澤田　謙

一

「何でも一歩先に眼を著けて歩いてゐれば、人間といふものは自然に進むものなんだなあ」。

少年デビソン[1]は街を歩きながら、ふとそんな事を口の中でつぶやいた。誰だつて歩く時には、無意識に一歩先に眼を著けて歩

(1)アメリカの銀行家。(西紀一八六七年—)つぶやく(呟)

二十日鼠　家鼠の一種。體は小さくて長さ三寸許。頭尖り尾が長い。好んで人家に棲み、夜間出て食を求める。

帳簿係　銀行の會計を帳簿に記錄する者。

くものだ。不思議でも何でもない。しかし少年は、一大發見でもしたやうに、その事を幾度も〳〵考へてゐた。さうして彼は、それを一生の方針にしてしまつた。

母親に早く死別れ、おばあさんの手一つで育てられたデビソンは、小學校をさがつて、或田舍銀行の給仕になつた。彼は忠實で勤勉な給仕であつた。終日二十日鼠のやうにくる〳〵動き廻つてゐたが、少しでも暇があると、默つて帳簿係の傍に立つてゐた。

「おい、そんな所に立つて、何をしてゐるんだ。」

「貴君が帳簿をつけるのを見てゐるんです。」

「君はいつ監督に出世したんだ。」

「えへ〜ゝ。」少年は頭を搔いた。

「君は帳簿のつけ方が覺えたいのか。」

「はい。」

貸附係　銀行の主要業務たる貸附を掌る者。銀行は一般の人から金を預り、これを集めて他の人に貸附けるのである。

昇進する　のぼりすゝむ。

副支配人　支配人を補佐する者。支配人は主人の營業の全部に就き代理權を有する者。

體得する　十分に會得して自分のものにする。

檜舞臺　檜で張つた歌舞伎芝居の舞臺。轉じて自己の力量を現すに適當な晴の場所の意。

「教へてやらうか。」

「えゝ。」少年は嬉しさうに、につこりとほゝゑんだ。

その日から帳簿係は、暇のあるたんびに、帳簿のつけ方を教へてくれた。帳簿係が他に用事のある時には、代つて手傳ふ事の出來る程、少年は上達した。そして帳簿係が貸附係に出世した時、少年も帳簿係に昇進した。一歩先に眼を著けてゐた少年は、先づ第一歩進んだのだ。

帳簿係に進んだ少年は、今度は貸附の仕事を教へられた。進歩は著しかつた。そして貸附係が副支配人に昇進した時、彼は貸附係に昇進した。少年はまた一歩前に進んだのだ。

「一歩先に眼を著けて歩む。」この簡單な眞理を體得したデビソンは、かうして確實に立身の梯を昇つて行つた。そして二十歳の時、愈〻ニューヨークの檜舞臺に登りたいと決心した彼は、支配人の

紹介狀を懷にして、午後の上りの汽車に乘つた。

二

紹介狀を示すと、そのニューヨーク大銀行の出納係主任は、色々深切に話してくれた。

「急にニューヨークの銀行に入るのは、なか〳〵むづかしい。……が、まあ考へて置いて上げよう。」

この「考へて置かう」は、體のよい拒絕である。デビソンはそれを知つてゐたが、彼は「どうぞ宜しく願ひます」と頭を下げて、機嫌よく歸つた。

「物事は一度で必ず出來るとは決つてはゐないんだ。二度でも三度でも……」彼はさう決心してゐた。

翌日、自分の銀行の仕事が終るとすぐ、彼はまたもニューヨーク行の汽車に乘つてゐた。出納係主任はまさかと思つてゐたデビ

出納係　金錢の收支を掌る者。

體のよい　かたちのよい。體裁のよい。

拒絕　ことわること。引受けないこと。

まさか　よもや。「まさか」の下に「來はすまい。」の意の語が省かれてある。

ソンの顏を見て、眼を圓くしたが、今度はもう少し拒絕の意味を明らかにした。

「君、さう急いだつてだめだよ、機會を待たなければ。」

「はい、何分ともお願ひ致します。」

その日も、彼はにこ〳〵して歸つた。

三日目にまたもその銀行を訪ねた時、小使の言葉は突慳貪であつた。

「もう御歸宅になりましたよ。」

「さうですか、御住所は。」

小使から聞いた私宅に訪ねて行くと、下男が出て來た。

「御主人は今、外出のしたくをしてお出でです。」

「では、お待ち致しませう。」

とう〳〵二人が三度目に顏を合せた時、出納係主任は吹出し

眼を圓くする　驚いたありさま。

突慳貪　非常に邪見なこと。

吹出す　をかしくてたまらず笑ひ出す。

破顔一笑する　顔色をやはらげて笑ふ。
をこがましい　出過ぎてゐる。
眞摯　まじめなこと。
上申する　事を上の人に申し上げる。

てしまつた。デビソンも破顔一笑した。が、すぐ眞面目になつて、また懇願し始めた、

「私は確信してゐます、貴下のお求めになつてゐる出納係は私なのです。きつと貴下を助けて、立派にやつて行きます。こんな事を自分で申すのはをこがましい譯ですが、他に言つてくれる人がないから、自分で言ふのです。どうか使つてみて下さい。決して失望なさるやうな氣遣はありません」。

その熱心、その眞摯、その忍耐が、少しづゝ主任の心を動かし始めた。主任は始めて口を開いた、

「で、君の給料に對する希望は」。

「年三千圓戴ければ滿足です。しかし、千四百圓でも、千二百圓でも、——私は食べて行かれゝばいゝんです」。

「よろしい。では、年三千圓で君を採用するやう、重役に上申して

辭表　辭職するに當りその旨を認めて差出す文書。
愕然　驚いたさま。びつくりしたさま。
異議　異なつた意見。故障。
行惱み　進むに滯りがちなこと。すらすらとはこばぬこと。
意向　考。
說得する　說いて得心させる。
一瞬　極めて短い時間。ほんのちよつとの間。

置かう」。

「有難う御座います」。

彼の不拔の精神が遂に勝つたのだ。彼は、今度こそは晴れ〳〵した顔をして歸つた。そして田舍銀行にはすぐと辭表を提出し、荷物を纏めて、ニューヨーク行のしたくをしてゐた。

しかし、幸運といふものは、さう急に來るものではない。彼はニューヨークの主任からの電報を握つて、愕然とした。

「重役より異議生じ行惱み中なり。若し君が地位及び給料を、約束より以下にて辛抱するなら、即時採用し得べし。但し君が約束の履行を迫る意向ならば、余もまた重役を說得するやう極力盡力すべし」。

デビソンは、一瞬、眼を瞑つた。が、すぐ電報用紙を取つて、さらさらと書いた、

行員　銀行員のこと。

小切手　銀行に當座預金をしてゐる者は、預金の範圍内で現金の引出すを代りに小切手を發行する。何某が出來る。自分の預金中から拂つてくれと支ふ手形の一種である。

振出人　手形を發行した本人。

全能神　何事でも出來ない事のない神。

「地位及び給料を下げる事、喜んで同意す。」

彼は自分を見出してくれた主任に迷惑を掛ける事を、恐れたのだ。なあにどんな下からだつて、一歩先に眼を著けて歩いてゐさへすれば、すぐに前進する事は出來る。かうして彼はニューヨークの大銀行の行員となつた。

三

果してデビソンは、主任が求めてゐた通りの出納係であつた。彼はいつでもにこ〳〵してゐた。彼がはいつてから、銀行は急に明るくなつたやうであつた。そして彼は誰よりも勤勉で、忠實で、沈著だつた。

或日一人の男が窓口に現れて、小切手を出した。

「これを拂ひ出してくれ。」

見ると、振出人には「全能神」としてある二千圓の小切手だ。

「おやつ。」

と、思はず見上げたデビソンの鼻の先には、短銃が光つてゐた。しかし、彼は落著いてゐた。いつもの通り愛想のいゝ微笑を浮べて、

「はい、全能神様振出の小切手ですね。……二千圓、宜しう御座います。」

わざと大きな聲で言ひながら、平氣で札を數へ始めた。この早速の機轉で他の行員がそれと感附き、すぐ警察へ電話を掛けたので、まだデビソンが金を支拂はないうちに、この兇賊は難なく取押へられた。

この劇的事件の記事が新聞に載つた日の夕方リバティ[一]銀行の重役會議があつた。

「このデビソンといふ男は、なか〳〵確りしてゐるやうだね。」

「さやう。一つ我々の銀行に引つこ抜いてやらうか。」

[一]正しくはリバティ・ナショナル・バンクといふ。一般市中銀行で、ニューヨークの大銀行の一。

引つこ抜く　引抜く。抜きとる。

副頭取　頭取の代理をする者。頭取とは銀行の專務取締役（または社長）をいふ。

拔擢する　引上げる。

處世法　世に處するみち。よわたりの方法。

株主　株式會社の資本は必ずこれを株に分ける。その株を所有する者、即ち株主である。

かうしてデビソンは、世界屈指の大銀行に入る事になつた。

リバテイ銀行に於ける彼は、熱心その物であつた。隨つてその昇進振も目覺しかつた。一年で彼は出納係主任に擧げられ、それから三年で副頭取に拔擢された。さうして遂にリバテイ銀行頭取の椅子に坐つたのは、その一年後であつた

三十臺で世界的大銀行の頭取。それは「一歩先に眼を著ける」デビソン式處世法の賜であつた。

銀行街の人々は、この異常の出世に眼を見張つた。

銀行の責任ある地位に就くと間もなく、デビソンは株主名簿を調べて、株主全部に次の手紙を書いた、

「貴下はリバテイ銀行株を何株御所有になつてゐますが、この株の價の上る事は、必ず貴下のお望みになるところと存じます。就いては貴下の御友人に勸めて、當銀行と取引を開かせる

顧客　おとくい。

配當　銀行や會社などが純益金を持株に應じて株主にわりあてくばること。

(一)アメリカ屈指の富豪。（西紀一八三七年―一九一三年）

金融界　金融の社會。

金融市場　金融とは經濟社會における資金の需要と供給との關係。

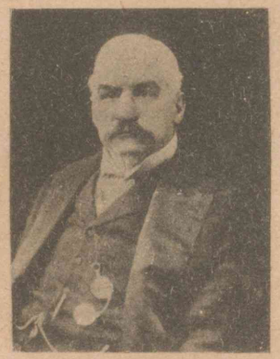
原動力　物事を動かす根本的な力。

玄關を叩く　訪問する。おとづれる。

やう、お骨折願へませんでせうか。我々は必ず顧客に御滿足を與へます。そして業務が繁昌すれば、配當も增す譯です。」

株主はデビソンの熱心に感激した。そして彼を得て、リバテイ銀行は間もなく二倍の成績を擧げた。

四



モルガン

「(一)モルガン氏は午後三時、自宅にて貴下をお待ち申し居り候。」

この手紙を手にして、デビソンはは

てなと小首をかしげた。モルガンとは一年以來絕えて會つてゐない。しかもモルガンと言へば、たゞにニューヨーク銀行界の王者であるばかりでなく、世界金融界の原動力なのだ。

彼は午後三時きつかりに、モルガンの玄關を叩いた。モルガン

戸迷ふ　行くべき方向を失ひ迷ふ。まごつく。

不得要領　要領を得ない。趣意がはつきりわからない。

は手を執らぬばかりにして、自室に招じ入れたが、椅子に腰掛けると、いきなり言つた。

「君、新年も愈〻近づきましたね。」

この一言には、流石のデビソンも戸迷つた。どんな重大な用件かと思つてゐたところだから、尚更である。止むを得ず不得要領の返事をすると、第二の不思議な質問が來た、

「で、君の方はそれでいゝのかね。」

「何をですか。」

「何をつて。……一月一日から君をモルガン商會の重役に來てもらふ事に決めてゐるんだ。」

「だつて私はまだ少しも聞いてゐません。」

「僕はまた、君の事だから、僕の態度でもう察してゐる事と思つてゐたんだ。」

高飛車　將棋から出た語。頭からおさへつけて物事を言つたりしたりするやうな場合に言ふ。

哄笑する　大いに笑ふ。どつと笑ふ。

雙肩に擔ふ　背負つて立つ。

いかにもモルガンらしい言ひ方であつた。天下無敵のモルガンは、いつでもかうした高飛車な態度で、物事をとん〳〵運んで行つたのであつた。

暫くしてデビソンが口を開いた。

「モルガンさん、貴下はビルディングの十八階から飛んだ經驗がありますか。」

「ないね。」

と、今度はモルガンが不思議さうな顏をした。

「私もありませんが、……若し飛んだら、丁度今の私と同じやうな氣持がするだらうと思ひます。」

主客は快く哄笑した。

かうしてデビソンは、年齡僅か四十歳で、世界金融の霸王たるモルガン商會をば、雙肩に擔ふ身となつた。その後の活動は後日

に讓る。しかし、彼が少年時代に發見したこの「一歩先に眼を著ける」といふ眞理は、平凡のやうで、實は不朽の大眞理であつた事を知らねはならぬ。

六　木曾川の渡守　その一

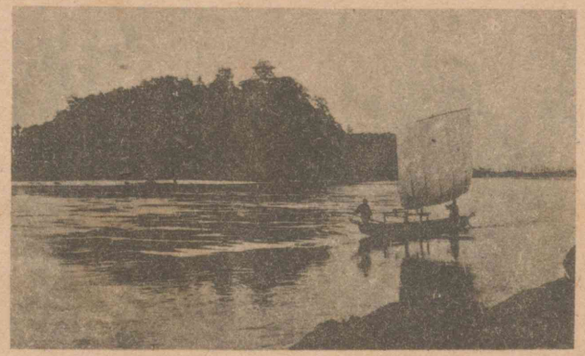
吉田（一）絃二郎

渡守といふ名は、聞くからに古風な感じがします。汽車が出來、鐵橋が出來た世の中では、渡守といふやうな古風な仕事は益々なくなつて行きますが、出來るならばいつまでも、渡守といふ古風な仕事は、世に殘して置きたいものだと思ひます。

馬も、自轉車も、荷車も、旅人も、猿廻も、男も女も一つの舟に

（一）小說家。本名は源次郎。明治十九年（二）佐賀縣に生れた。五六年（四）

乘つて、小雨のそぼ降る中を、靜かに流を横切つて渡されて行く情景などは、確かにゆかしい繪になつてゐます。



木曾川

三四年前の事でした、私は名古屋（一）へ行つて、それから犬山（二）城へ廻つて、城の下から一艘の舟を雇つて、木曾（三）川を下つた事がありました。名古屋を包んでゐる大平野には、蓮の花が到る所に薫つてゐました。鈴鹿（四）や伊（五）吹などの山々が、晴れわたつた空の彼方に仰がれました。織（六）田、豐臣（七）時代を通じて、この邊一帶の山野は、千軍萬馬の馳驅

小雨そぼ降る情景

（一）愛知縣名古屋市。（尾張國）

（二）愛知縣丹羽郡犬山町。（同國）

（三）本州中部地方西南部の大川。長野縣西筑摩郡の北境に發し、流程二三二キロメートル。

（四）三重縣鈴鹿郡の西部にある山。國（伊勢）の總稱。今は鈴鹿峠の事を言ふ。

（五）岐阜、滋賀縣に跨がる山。標高一三七七メートル。

（六）織田信長の時代。

（七）豐臣秀吉の時代。織田、豐臣時代は正親町、後陽成兩天皇の御代に當り、その凡そ二二三四年間である。二五八年

馳驅する

する巷であつたのですが、秋近い青田は濃尾の平野を埋めて、白雲悠々、一鳥啼かぬ靜寂の氣が漂つてゐました。

その時私は、若い船頭が舟を操りながら、ぽつり〳〵と、昔其所に住んでゐた渡守の物語を續けるのを聞きました。大きな感動を受けて聞いたその話を、私は未だに忘れずにゐます。

いつの頃であつたか、或秋の日、突然旅の若者が、木曾川の岸の松林にたどり著きました。まだその頃は、その松林のあたりには、猪が出て來たり、狐や狸が、犬のやうに日中でもごろごろ寢轉んでゐたりしました。

旅から來た若い男は、もと可なりな身分の侍であつたと

難澁する

流に棹さす

見えて、刀なども立派なのを持つてゐました。

若者は自分で山の木を伐り、小屋を建てゝ、美濃の方の岸に住著きました。

その頃は、渡舟といふ物がまだその近くにはなくて、旅人は大變難澁してゐました。

若者は山の木を伐倒しては、斧を振上げて、頻りと何かこしらへてゐました。一箇月許經つと、この若者の手で一艘の舟が出來上りました。

若者は美濃の方の岸から尾張の方の岸へ木曾川を横切つて、夜も晝も流に棹さして、旅の人たちを渡してやりました。しかし不思議な事には、決して自分から賃錢を請ふ事を

代償

間諜

(一)經の名。法華經の一部。

しません。氣の毒だと思つて賃錢を支拂ふ人があれば、僅かの賃錢をもらつたり、または辨當の殘りなどを代償としてもらつたりするに過ぎませんでした。

美濃の國の役人たちも、尾張の國の役人たちも、最初はきつと敵の間諜だらうなどと疑つてゐましたが、雨の日など旅人が通らない時には、一人で小屋の中で觀音經(一)を讀んでゐて、餘念もありませんでしたので、いつしかその疑は晴れてしまひました。

或年の秋、丁度二百十日頃の大暴風雨の日でありました、美濃の國の大名が、急に江戸へ行かなければならない事になつて、大急ぎで木曾川の岸まで駈附けました。お供の人々を合せて、主從七人連でありました。しかし、どの渡場でも、金をどれ程澤山積んでも、命が惜しいから、舟を出さうと言ふ船頭は一人もありませんでした。大名は困つてしまひました。その日すぐ木曾川を渡らなければ、江戸へ到著する日限が切れてしまふから、場合によつては、殿樣は腹を切らなければならないかも知れぬといふ、せつぱ詰つた場合だつたのです。お供の人々は、叩きつけるやうな大暴風雨の中にずぶぬれになつて、岩をも山をも呑みさうな怒濤を徒に眺めて、蒼白い顏をして立つてゐるばかりでした。

日限が切れる

せつぱ詰る

篠突く雨

その時一人の若侍が、ふと川上の松林の中の渡守の事を思ひ出しました。彼は馬を馳せて、篠突く雨の中を、二里許も

松林の小屋をさして飛んで來ました。小屋に著くや否や、若侍は馬から下りて、その入口に立つて、「これ船頭、一生のお願ちや。誠にお氣の毒ちやが、この荒波の中を、一命を捨てると思つて、舟を出してはくれまいか」と、折入つて賴みました。

折入つて賴む

「それはまた何ぞ火急な御用ででも御座りまするか」今まで讀んでゐた觀音經から目を放して、かの渡守は若侍に尋ねました。そしてすぐ小屋の前を、大吹降りの中を、もの凄く逆卷いて流れる濁水の上に目をやりました。とても舟は出されまいといふやうな不安な色が、渡守の顏に浮びました。

火急な用

逆卷く

「實は殿樣が火急なお召で江戸へお越しになるのちやが、若し今日中にこの川を渡つて行かねば、或は御切腹にならないとも限らぬ」若侍はもう堪らなくなつて、ぽとりと涙を落しました。

若侍の涙を見ると、今まで思案してゐた渡守は、忽ち決心したらしく、「では、舟をやつてみるで御座りませう。私に出來るか出來ぬかは知れませぬが」と、力を籠めて申しました。

「忝い。それでは舟をやつて下さるか」若侍は、地に額をすりつけるやうにしてお禮を言ふと、すぐ再び馬を馳せて、いらいらしながら待つてゐる殿樣や家老たちの所へ歸りました。

若侍の報告に接した殿樣や家老たちは、救はれたと思ひました。しかし、渡場の役人や船頭たちは、「あの松林の中の素

素人

人船頭に、この川が渡せて堪るものか。お氣の毒だが、殿樣はじめ一同の死骸が、今に川上から流れて來るに違ない。」と、嘲笑つてゐました。

七　木曾川の渡守　その二

殿樣や家老たちは、若侍の後から馬を列ねて、川上の松林の方へ、暴風雨の中を急ぎました。

「ともかくも、力の限り舟をやりまするが、親代々の船頭でさへお斷り致しまするこの荒空に、私のやうな俄船頭ではおぼつかないかと思ひまする。しかし、どうせ江戸でお腹を召されるくらゐなら、この荒波の中でお果てなされまして

お腹を召す

も、武士としての御名は立ちまする道理。どうぞ討死の御覺悟でお舟へ……」と、渡守は言ひました。その言葉は、世間の船頭たちのとは違つて、いかにも凜として、力に滿ちてゐました。

凜として

「いかにもさうぢや。喜んで死の川へ乘出すのぢや」と言つて、殿樣は眞先に舟に乘移りました。

七人の主從を載せた一艘の小舟は、不思議な船頭に操られて、逆卷く濁流の中へ突入りました。嵐は百獸の咆えるやうな音を、眞暗な空に立てました。波は幾度か舟を呑んでしまはうとしました。七人の乘客は生きた心地もなく、舷にしがみ附いてゐました。唯一人渡守だけは、凜然として艫に立つて、聲高らかに觀音經を誦しつゝ、自由自在に舟を操りま

熟練

渡し了す

した、とても人間業とは思はれぬ程の沈著と熟練とをもつて。

川下の渡場の役人や船頭たちは、七人の武士の死骸を待つてゐました。が、遂にそれらしい物は流れて來ませんでした。それのみか、松林の渡守が見事に七人の武士を尾張の岸へ渡し了せたといふ事を、間もなく聞きました。尙その上に、その渡守は千兩といふ大金を殿樣から戴いたが、それを殘らず附近の百姓たちに分けてやつて、自分は一文も懷に入れなかつたといふ話さへ、彼等の耳にはいりました。

「あの男は人間ぢやない。」

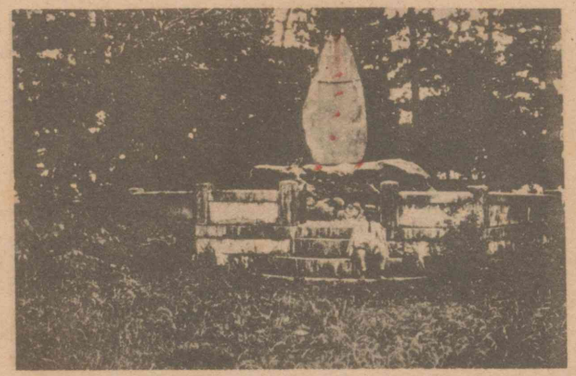
彼等はかう言つて、いつしかその渡守を尊敬するやうに

話題になる

(一)薩摩（今の鹿兒島縣）の藩主。

(二)寶曆二年（一七五二年）江戸幕府は將軍の家重の名により島津家に木曾川の治水工事を命じた。

なりました。



寶曆治水碑

「一體あの渡守はどこから來たのだらう。」

「前は何をしてゐたのだらう。」

などといふ事が、皆の話題になりました。

「(一)島津家の御家來かも知れない。」

と言ふ人もありました。

昔、(二)島津家が將軍の命令で木曾川の治水工事を行つた時、その難工事が立派に出來上つた後で、島津家の御家來たちは、經費がかゝり過ぎたといふので、

(二)寶曆二年（一七五二年）江戸幕府は將軍の家重の名により島津家に木曾川の治水工事を命じた。家老平田靭負が工事を引受けて、寶曆五年に完成した。が、寶曆の用費は豫定以上にかさんだので、責任を負つて木曾川に身を投じた。人柱もなしに堤を突き切つた。人柱は七十九人で、各自腹を切つた。

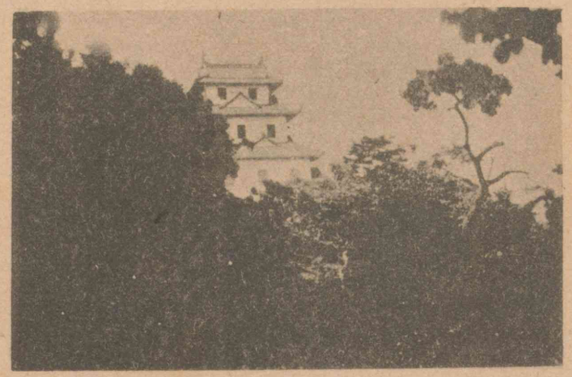
責任を重んじて、數十人一度に腹を切つた事がありました。ですから或人は、

「あの渡守は、あの時に腹を切つた侍の仲間の一人であらう。あの時に切腹しなかつたので、その罪を償ふ爲に、渡守をしてゐるのであらう」。

と申しました。しかし、當の渡守は、自分の過去の事に就いては、一言も洩しませんでした。尋ねられると、いつも唯ほゝゑむだけで、口を開いて自己を語るといふ事はありませんでした。

木曾川の岸には幾艘もの舟が繫いでありました。その繫いだ舟には水車がしつらへてあつて、それが絶えず水を蹴

つて廻轉してゐました。



金華山上の城

「あれが(一)金華山のお城ですよ」と、船頭は北の方を指さしました。其所には高い岩山の上に、白い城壁が夕陽を浴びてゐました。落日の光は遠く近く連なる一帶の山々を、ほんのりと包んでゐました。

私の若い船頭は、頻りに棹を突張りました。川の面には夕霧が漂ひ始めました。(二)笠松の町が土手の上に現れて來ました。

(一)岐阜市の東郊にある。一名稻葉山といふ。岐阜城の址。

(二)岐阜縣（美濃國）羽島郡。岐阜市の南方八キロメートル。木曾川の河港をなしてゐる。

八　小さい旅人

薄田泣菫[1]

(1)詩人。名は淳介。明治十年(一八七七年)岡山縣に生れた。

私たちが七つ八つの頃には、そろ〳〵秋が更けて來ると、晴切つた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見掛けると、吹曝しの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

吹曝し

雁よ棹になれ
棹になつたら鉤になれ

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみ込んでしまふまで、聲を涸して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡る事は、よく〳〵人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまた後の丘に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雜木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥と言ふと、私は海などを越えて來るあの小さい旅人の、あわたゞしい旅を考へて、いつも、言はうやうのない寂しい旅心地を覺える。

百舌（鳥類寫生圖譜所載）

先づ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎて、そろ〳〵日影が黃色がゝつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると、暖かい日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あゝ、もう秋だな」と、思はず振返つて見ると、矮小なくぬぎに雜つて、ずばぬけて背の高

甲高い聲

くぬぎ（櫟）

にれ(楡)

いにれの木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら〳〵してゐるのが見える。私たちはその瞬間、言はうやうのない、強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

ひたき(鶲)

次には、ひたきが來る。山家の午過、だるさうなきり〴〵すの聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやらやつれた人の溜息とでも言つたやうな微な聲が漏れて來て、何の音ともわからない。すると樹蔭の韮畑かどこかで、餘念もなく

やつれる(窶)

ひたき(同前)

せつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに小鳥がついと身をそらして逃げて行つてしまふ。それがひたきだ。

ひたきと言つたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて、唯獨りで出て來る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり、ひよくりと輕い御辭儀をして、さゝやくやうな聲で歌ひ出す。私はそれを見ると、人の爲、世の中の爲と言つたやうな譯でなく、自分一人の爲に歌つて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

さゝやく(囁)

ひたきが來て、ものの十日と經たぬ間に、四十雀が來る。こ

の鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んで來る。山から里へ移るをりなどには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、眩しい程すばしこく、雀のたごなどを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、透徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしやべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸切らない灰色の産毛そのまゝの雛兒が雜つてゐて、どうかすると高い枝に止り

四十　雀（同前）

もんどり打つ
女せた身振
ひゞ（罅）
きさく
みそさゞい（鷦鷯）
こたつ（火燵、炬燵）

損ねて、もんどり打つて宙に返る事もあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育のすばしこい、ささくな魂その物を見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、みそさゞいが來る。これはひたきと同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。冬の初の午過、山近い田舍の小家で、爺さんはこたつに潜り込んで、こくり〳〵と居眠をする。その側で婆さんはせつ

みそさゞい（同前）

せと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐に弔した干菜の影がみすぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、睡さうな紡錘の音がぱつたり止むと、こそ〳〵と掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい〳〵と小刻みに籬を傳はつて、隣から隣へと、狹苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。それがみそさゝいである。

みそさゝいと後先になつて頰白が來る。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頰白が灰色の胸までぐしよぬ

うづら（鶉）
しぎ（鴫）

れになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の鳴聲を解いて、

頰白（同前）

一筆啓上つかまつる
子供泣かすな火の用心。
今度は便りに金十兩、
やりたいけれど
一文も御座なく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみ〴〵世渡のむづかしさと、旅心の寂しさとを思はずにはゐられない。

後の雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野にはもうそろ〳〵うづらが來、しぎが來る。

九雁

千家元麿[1]

(1)詩人。明治二十一年(二五四八年)東京市に生れた。

暖かい靜かな夕方の空を、
百羽ばかりの雁が
一列になつて飛んで行く。
天も地も動かない靜かな景色の中
を不思議に默つて、
同じやうに一つ〳〵せつせと羽を
動かして、
黑い列をつくつて、
靜かに音も立てずに横切つて行く。
側へ行つたら翅の音が騷がしいの

だらう。
息切がして疲れてゐるのもあるだ
らう。
だが、地上にはそれは聞えない。
彼等はみんな默つて、
心でいたはり合ひ、助け合つて飛ん
で行く。
前の者が後になり、後の者が前にな
り、
心が心を助けて、せつせ〳〵と
勇ましく飛んで行く。
その中には親子もあらう。
兄弟姉妹も友人もあるに違ない。

この空氣もやはらいで靜かな風の
ない夕方の空を選んで、
一團になつて飛んで行く
暖かい一團の心よ。
天も地も動かない靜けさの中を、
汝ばかりが動いて行く。
默つてすてきな速さで、
見てゐるうちに通り過ぎてしまふ。

——現代詩人全集——

(一)德川幕府の正綱の參子。智謀があり智慧伊豆と稱せられた。初めは忍城に三萬石が、島原の亂の功を食んだ。寛文二年(一六六二)、十二年(一六七二)歿。

(二)埼玉縣北足立郡大和田町野火止。

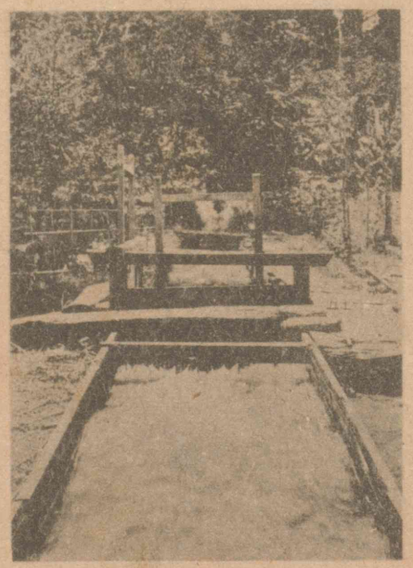
(三)山梨縣丹波山に發し、東京府西多摩郡に入り、東京市蒲田區羽田に至つて、六郷川となり、東京灣に注ぐ。

一〇　灌漑

松平伊豆守信綱の代官に、安松金右衛門といふ者ありけり。伊豆守の領分野火止(二)といふ所に多摩川(三)の流を引きたらんには、開發の田地もあるべきや否やと議せられしに、いかにも宜しかるべき由を申す。凡そ黃金三千兩を費すべきにやとありしかば、伊豆守聞きて、「余今この地を領すとも、またいづ方へ移らんも知れざれど、三千兩の黃金を費じて永くこの地の利あらん事、且は公儀への奉公の一つなり」とて、安松に命じ、十六里が程溝を穿ちて、新河岸(一)といふ所に至りたり。かくて水流れ入るかと待つに、水更に來らずして、一とせを經たりけり。伊豆守安

且は

(一)埼玉縣入間郡。川越市の南方。



野火止用水

松を召して、「いかで水は入らざるぞ」とありしに、「いかにも水は入るべきにて候。何さまにも故ありぬと存ず」と言ふ。「その故いかに」とありしかば、「未だその由をば心得候はず」と答へけり。またの年にも水入らず。また安松を召して尋ね問はれしに、「さりとては、水は入るべきものに候へども、かくのみ候こと、返す〳〵不審に候。但しこの地は武藏野にて候へば、凡そ川越[一]の城下の人家、常には疊の上に柿紙などを敷き、客來ればこれを卷きて、さて請じ候。これ地乾きて、しかも風常に荒れ、忽ちに座中塵埃に埋るゝ故なり。然るに今年は城下の塵埃むかしのやうに候はず。殊に武藏野に植ゑ候畠物、今年程豐かに候事、終に覺え候はず。多摩川よりこの溝に流れ入

[一]埼玉縣川越市。

る水を廣き野に引き候故に、未だ流れ來らざるにや。この水廣野に充ち滿ちたらん後は、必ず流れ來るべきものと存ず」と答ふ。羽生、又右衞門といふ代官こゝらを掌りければ、やがて召して尋ねられしに、「されば、今年程野に植ゑし萬づの物豐かなる事は覺え候はず」と申しゝかば、伊豆守また宣ふ事もなし。またの年にも水來らず。この時も安松を召して尋ねられしかど、去年の如く答へてければ、「汝が地の高下を審かにせざるが故に、水流るゝに堪へざるにあらずや」と言はれけれども、驚く氣色もなし。三年といふ秋大雨のありける後に、雷の鳴る如く水音夥しくとゞろきて、この溝に溢れ滿ち、平地をも水行くばかりにて、六七寸許あるあゆの魚流れ來

あゆ（鮎）

る事夥しく、唯一時に十六里が程に流れ渡りて、新河岸の川に流れ入りてけり。さる程に田地も開けて、野火止二百石の地、忽ち二千石の地となりぬ。伊豆守安松を召して、この年頃汝を責めたりしに、つい驚く事もなく、重ねて溝を修しなんともせざりし事、神妙に覺ゆるものかな」とて、一倍の祿賜はりて、三百五十石になされたり。安松はその後次第に經あがりて、高き職を掌るに至りたり。

（遺老物語に據る）

神妙

一一　多年一日の修養

村上專精[一]

佛教徒間に天然の彌勒[二]なく、自然の釋迦[三]なし」といふ諺がある。その意味は、彌勒も釋迦も自然にあれ程の地位になつ

（一）佛教學者、文學博士。兵庫縣の人。昭和四年歿、年七十九。
（二）彌勒菩薩。
（三）釋迦牟尼。

たのではない。多年一日の如く修行を怠らなかつた結果として、一は菩薩となり、一は佛陀となつたのであるといふのである。また支那の大聖孔子は、生れながらにして道を知つてゐた者のやうに考へられ易いが、論語の中で孔子は自らその經歷を語つて、

「吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲するところに從つて矩を踰えず」。

と言つた。卽ち自分は十五歳の時から七十歳に至るまで、一日として怠る事なく修養を續けて來たといふのが、孔子の告白である。これによつて見ても、釋迦や孔子のやうな大聖

（一）支那周時代の聖人。名は丘、字は仲尼。魯の人。周の敬王四十一年（西紀前四七九年）歿、年七十三。
生れながらにして

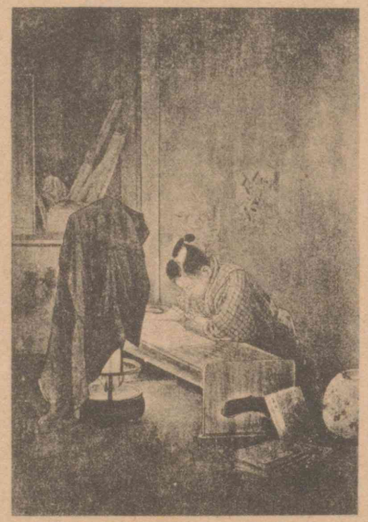
人ですらも、多年一日のやうに修養を繼續した結果、始めてあのやうな萬人の光と仰がれる偉い人物となつた事がわかる。まして我々凡人は、一層修養を續けて行く事を心掛けないでは、勝れた人物となる事が出來ない所以を、自覺しなければならない。

しかし、世人一般の通弊として、他人に何か勝れた所のあるのを見ると、とかく輕卒にこれを評して、彼は才子であるとか、或は彼は幸運兒であるとか言ひたがるのである。例へば、(一)賴山陽と言へば、誰もあの人は才子であつたと考へ易く、彼の成功は勤勉によるものであるとの考を抱く者は誠に少い。しかし、傳記によつてこれを見ると、前者の誤謬である

(一)江戸時代末期の學者。名は襄、通稱久太郎。安藝の人。天保三年(一八四二年)歿、年五十三。

事が明らかなのである。

賴山陽は江戸時代の儒者賴(一)春水の子である。彼は生れて僅かに八九歲の頃、既に幾多の軍記物を讀んで晝夜怠る事なく、時に寢食を忘れる事もあつた。偶、眼病に罹つたので、父春水はその讀書を禁じたけれども、なほ隱れてこれを讀む事を止めなかつたといふ。子供の時の山陽は既にこのやうな勤勉家であつた。また傳に「山陽平生讀書に耽り、著述に勤む」とあつて、彼は終生著述に勤めた人である。卽ち彼の壯年の時の傑作



山陽の幼時（水野年方筆）

(一)名は惟完、通稱彌太郎。文化十三年(一八一六年)歿、年七十一。

は日本外史であり、また晩年の大作には日本政記がある。日本政記は病中に成つた。彼はその病が革るに遇ひ、「我が死まさに迫れり」と言ひながら、なほ眼鏡を掛け、手に日本政記を取り、刪補して止まなかつた。或日俄に左右を顧、「我まさに假寢せん」と言つて筆をおき、眼鏡を掛けたまゝで終に瞑したといふ。彼の少年時代の事を思ひ、また末期の傳を見れば、山陽の生涯は勤勉を以て一貫されてゐたと言つてよいのである。

但し彼は生來酒を嗜んだ。毎日夕刻になれば必ず門下生と共に對飲したさうである。けれどもその分量に制限があつて、制限以上には一杯も過す事はなかつた。そして酒氣の

(一)二十二卷。源平二氏より德川氏に至る家の歷史を漢文で書いたもの。

(二)十六卷。神武天皇より後陽成天皇に至る二千年間の編年史。

五更

ある間は門下生と共に談論し、醒めれば卽ち書を讀み、五更に至らなければ眠らなかつた。朝はまた必ず早起し、しかも自ら衾を收めて、人を使はず、室内の掃除もまた自らこれをなし、寒暑一定して變る事はなかつたといふ。彼は常に人に語つて、「山陽は才子なりと言ふ者は、未だ我を知る者にあらず。山陽はよく勤めたる者なりと言ふ者こそ、眞に我を知る者なれ」と言つたさうである。

彼を思ひ此を考へるに、山陽は唯才子であつたと思ふのは誤謬に外ならぬ。彼は多年一日のやうな修養によつて、自己の天才を喚び起した人である。獨り山陽ばかりでなく、何人でも一つの長所を有し、達人であるとか、上手であるとか

評せられる程の人は、必ず多年一日のやうに修養して、自己の天才を喚び起した人に違ない。

しかも修養は、一旦その天才を喚び起す事に努めたら、後はこれを廢してもよいといふ譯のものではない。終生を期して廢する事のないのが、眞の修養である。若し中途でその修養を廢したならば、そのやうな人は、その日から學問なり技能なりの退歩する人と見てよい。飜つて老後に至つてもなほその道に於て退歩しない人があるならば、その人は常にその道の爲の修養を繼續してゐる人と見てよい。

みればたゞ何の苦もなき水鳥の
足にひまなきわがおもひかな

(一)水戸藩第二代の主。元禄三年(一六九〇)歿、年七十三。世に水戸黄門または西山公といふ。

といふ歌がある。これは水戸黄門(一)徳川光圀卿の作と聞いてゐるが、實にその通りである。江河の水面に鴨などの浮んでゐるのを一見すれば、木の葉などの浮いてゐるのと殆ど同樣で、何の苦もなささうに見える。しかし、近寄つてよくこれを見ると、少しの暇もなく彼は我が足を使ひ、その足の力によつて浮んでゐるのである事がわかる。人もまたそのやうに、外見だけでは何の苦もなく出來る事のやうであつても、その人自身にあつては、常に暇なくその道の爲に盡すところがあるに違ない。

人間萬事休息すれば必ず退歩する。水は絶えず流れ動いてゐれば腐らぬが、停滯してゐると腐る。この規則の存する

事を忘れぬやうにせねばならぬ。隨つて修養は生命のあらん限り廢すべきものではない。多年一日のやうに繼續すべきものである。そしてさうするのが眞の修養である。

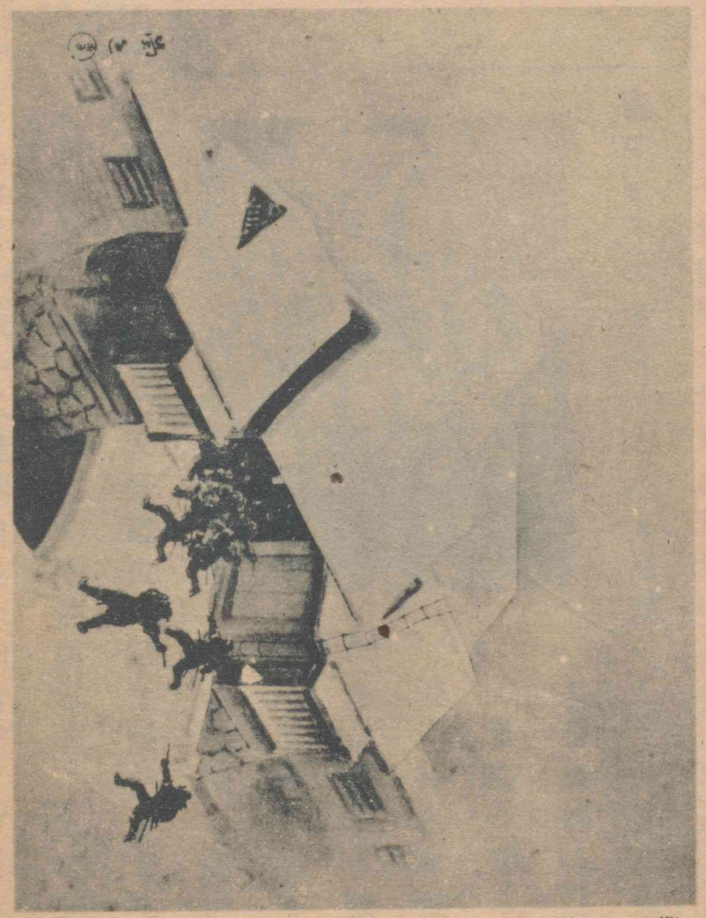
——通俗修養論——

(一)史論家。名は彌吉。靜岡縣の人。大正六年歿、年五十四。
(二)兵庫縣（播磨國）赤穗郡。城主は淺野內匠頭長矩。
(三)元祿十四年（一三六八年）三月十四日、長矩は吉良義央を江戸城中で傷つけた。
(四)名は滿榮。四十七士の一人。
(五)名は重實。討入の前自殺した。
(六)通稱內藏助。自盡
(七)名は元辰。四十七士の一人。
(八)名は信清。四十七士の一人。

一二　大石良雄　その一

山路愛山(一)

赤穗(二)の城下は早駕籠の爲に大騷となりぬ。江戸城中刃傷(三)の報藩邸に達するや、早水藤左衞門(四)、萱野三平(五)は直ちに駕籠に乘りて、日に行くこと三十里、五日にして赤穗に達し、變を國老大石良雄(六)に報じたり。長矩自盡の命下るや、原惣右衞門(七)、大石瀨左衞門(八)は更に同じ早さを以て赤穗に達したり。君家



義士討入　小山榮達畫

衆情恟々
門閥
庸愚
器局
光を韜む
隱然

(一)赤穗藩の重臣。大石良雄が故主の復讐を謀つた時、反對論の首唱者となり、世人に侮辱されて去り、行方不明となつた。

事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たぐふ者なく、しかも溫厚にして一見庸愚なるが如き大石良雄は、茲に始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を被りて、久しく光を韜める彼は、漸く衆人に驚異せられぬ。赤穗城中の會議は開かれたり。事情は愈〻明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野(一)九郎兵衛は良雄と同じく赤穗の家老にして、班は良雄の下にありしが、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりし

大石良雄木像

恭順

城を枕にす

左袒す

(一)今岐阜縣大垣市。城主戸田采女正は長矩母方の從弟。

(二)元祿十四年。

籠城

かば、勢力は却つて大なりき。彼は專ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、なるべく溫和に城を明渡さん事を主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、「先づ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめん事を幕府に請ふべし。」と。

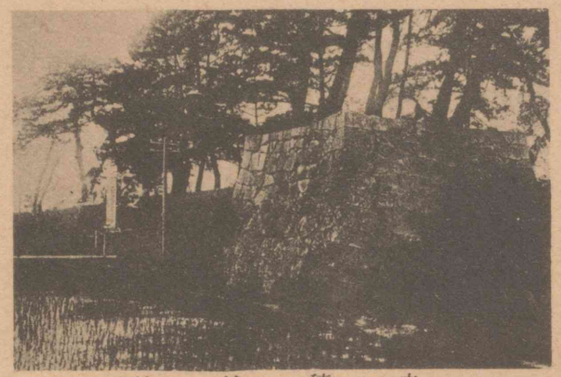
越えて二日、城中の會議はまた開かれたり。良雄は前說を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の說に左袒せり。(一)大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふ事の、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。(二)四月十二日、大野は遂に遁逃せり。人は減ぜり。籠城は遂に

殉死

難に投ず

血沸く

行ふべからずなれり。



赤穗城址

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の說を執れり。復讐の說は勝てり。血判に與る者百十餘人、そのうち江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。

道路は淸潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日、赤穗城の上より受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日、城は難なく明渡さ

誹謗

(一)今京都市東山區。

優游自適

四通八達の地

天下の視聽を集む

(二)羽前(山形縣)米澤侯。吉良家の親戚。

諜者

(三)通稱忠左衛門。一黨の故老であつた。

れたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穗藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。誹謗は始れり。罵詈の聲は容赦なく彼等の面を打てり。天下は未だ復讐の議の、既に内に熟せるものあるを知らざりしなり。

良雄は京都の山科(一)に住して、優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて、永住を裝へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏(二)の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。蓋し當時江戸にありて同志を統率せし者を吉田兼亮(三)となす。彼年六十二、秩百五十石に過ぎず、職郡代に過ぎざりしが、才名最も高く、世事に熟したりしを以て、良雄の親信するところとなりき。上杉氏は吉良氏を保護する事に努め、人を遣して吉良氏の邸(一)を守らしめ、且その采邑の人にあらざれば婢僕に用ふる事なからしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

(一)江戸本所松坂町。

采邑

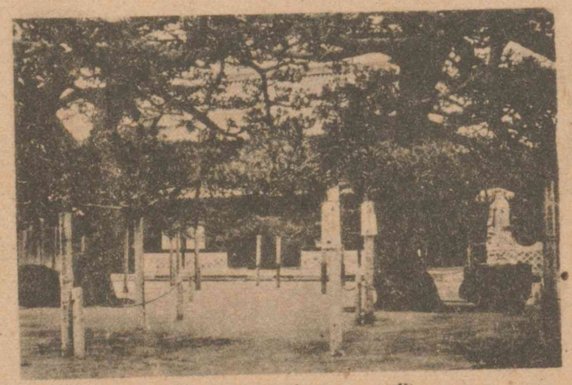
(二)長矩自盡の日。

(三)赤穗町大字上假屋。舊赤穗城内にあつた淺野家三代の菩提寺。

花謝し鶯老ゆ

年は暮れぬ。記憶すべき(一)三月十四日は再び來りぬ。赤穗の華岳寺(三)は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は老いて、四條河原(四)の

(四)昔、京都の四條河原で祇園祭禮の日(六月七日)から十二日間行はれた納涼。



華岳寺

破廉恥

恬として關り知らず

一縷の望

義氣金鐵の如し

夕涼に都人の群集雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉恥の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。しかも彼は恬として關り知らざるものの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。言ふ、「長廣藝州に預けられたり」と。一縷の望は絶えぬ。この時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣によりて君家の或は再興せられん事を希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、また復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等にその眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。この年夏、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅(一)石東氏に託し、獨り長子良金(二)を携へて江戸へ向ひぬ。

(一)石東源五兵衛。但馬(兵庫縣)豐岡城主京極甲斐守の家老。

(二)通稱主稅。

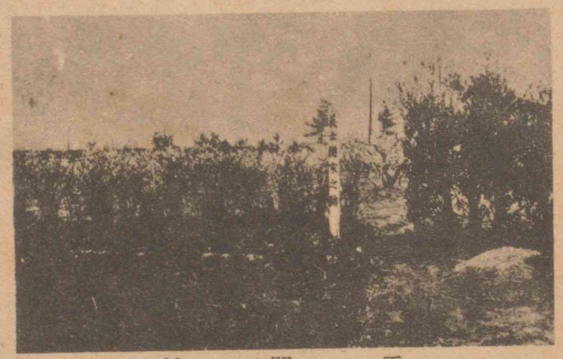
一三　大石良雄　その二

吉良氏の防衛はなほ密なりき。彼はその本所の邸を以て卑濕なりとし、これを修補するまで麻布(三)なる上杉氏の別邸に住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ

(三)江戸麻布我善坊。今東京市麻布區我善坊町。

刺客

餘命おぼつかなし



平間村

一死を賭す

白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。しかも良雄は聽かざりき。

良雄父子は直ちに江戸に入る事を敢へてせざりき。彼は先づ池上の平間村にありて、吉良氏の動靜を窺ひ、十一月五日に至つて漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵衞、同佐内と名のりぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至りて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年はこれを窺へり。彼等は何所より來つて、何所へ去るを知らず、五更に至つて他の一隊と交代せり。流石の吉良氏もこれに氣附かざりき。言ふまでもなく、これ良雄の使ひ

(一)今神奈川縣川崎市。

しところなり。しかも間諜、探偵すべて功を奏せず、祕密は却つて吉良家に出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は卽ち定まりぬ。

十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

雪霏々たり

この夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事裝束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。既にして再び笛は鳴れり。火事裝束せる四十七個の人物は、吉良邸を出去れり。時に雪晴れて、夜は全く明けたり。蹂躙せられたる

鬪諍叫喚

(一)通稱勘平。
(二)今東京市芝區高輪。曹洞宗。

喧噪

風説區々
飛語紛々

(一)通稱助右衞門。
(二)但馬國(兵庫縣)出石の城主久尙。

邸内の積雪のみ、獨り昨夜の慘劇を物語り居れり。

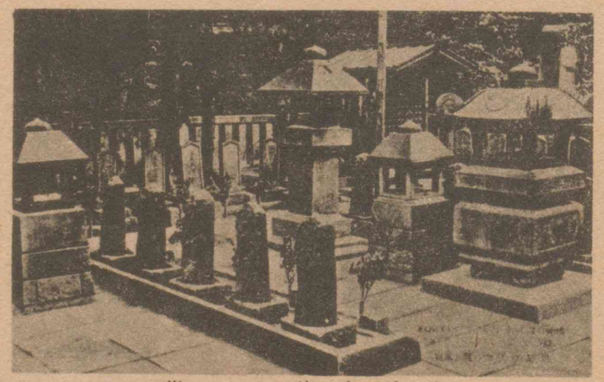
清暉は輝き渡れり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして急げり。忽ち聞く、路人の喧噪なるを。始めて知りぬ、赤穗の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。

風説は區々たり。飛語は紛々たり。曰く、吉良氏を襲ひし者は獨り四十七人に止らず、この外なほ黑裝束をなせる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。曰く、上杉氏の兵は四十七人を追擊せり。曰く、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。

良雄は吉田兼亮、(一)富森正因を大目附仙石伯耆守(二)の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みてその志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて、壯士を勞へり人あり言ふ、「上杉氏の衆至る」と。良雄は同志を警めて防禦の備を爲せり而して上杉氏の衆は遂に來らざりき。

官裁

この日、良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細

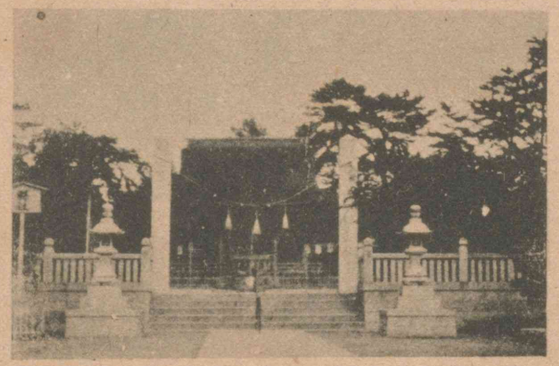


泉岳寺義士の墓

川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

良雄は幽囚の身ながら、極めて優遇せられたり。殊に細川氏は最も鄭重に彼等を取扱へり。

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の杯を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。



大石神社

自裁す

良雄は外溫藉にして、內に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事もうち靜めて、騷がし

溫藉

き事を嫌ひたりき。彼はいかなる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒に平和を愛する者にあらず。成すべき事は必ず成遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と、戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職としてこの品性ありしに由れり。

長者たる品位失墜す

主一

職として

—愛山文集—

(一)劇評家。名は義一。高知縣の人。昭和十二年歿、年六十三。

(二)興里　三七日　二十一日。

(三)越前に生れた。初め甲冑師であつたが、近江長曾根に至つて刀工となり、後江戸東叡山下に住んだ。隱居して虎徹と稱した。寛文延寶頃の人。(一六二二年―一六八〇年)

(四)貞宗　工の貞宗の弟子なる名工の住、建武頃(一三三四年)のやうであるとてかく稱せられた。

(一)中內蝶二

名人同志

「今日より三七日の間に冑一具を作つて獻るやう」。

興里の許へ前田侯からさういふごさたがあつた。

「今日より三七日の間に太刀一振を鍛へ上げて獻るやう」。

貞宗の許へもさういふごさたがあつた。

興里は五六年前から金澤の城下に出て來た甲冑師であつた。この男の作つた物は、冑でも甲でも殊の外堅牢で、先づ當代での名人であらうとの評判であつた。ところへまた、去年あたりから今貞宗と名に呼ばれる刀劍師が同じ城下に現れて來た。そこで、貞宗の刀が斬れるか、興里の冑が堅いか、近習たちの間に問題となり、さては前田侯よりのごさたとなつたのである。

興里も貞宗も、そんな事情があるとはお互には知らなかつた

堅牢　堅くて丈夫なこと。

近習　貴人に側近く給仕する少年。小姓。

冥加至極　冥加は神佛が冥々のうちに加護を垂れること。此所ではこの上もないしあはせの意。

齋戒沐浴　ものいみをし、からだを清めること。

丹精を凝す　まごゝろをとめる。心のたけを盡す。

目通　貴人の前に出て謁見すること。

家中　藩中。

威儀を正す　たちゐふるまひの作法を正す。

面目を施す　ほまれを得る。

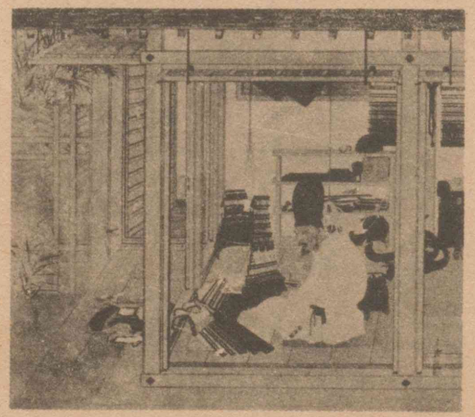
が、各自は冥加至極な事だと思つて、齋戒沐浴、丹精を凝して鍛へ上げた刀と、作り上げた冑とを持つて城中へ伺候した。やがて君侯の目通を許され、愼んで御前に罷り出た時、興里と貞宗とは始めて面を見合せて驚いた。

君侯の御座所から一段下つて左右には、家中の侍がずらりと威儀を正して並んでゐた。

前田侯は出來上つた刀と冑とを一應あらためて見た。

「おう、これは太刀も冑も天晴の出來だ。兩人共骨折であつた」。

褒美のお言葉に興里も貞宗も面目を施して、厚く御禮を申し上げた。



甲冑師（尾形月山筆）

矢丸は言はでもの事　射られた矢は言ふまでもない事……。

ひゞわれ　ひゞのこと。

切味　刃物のきれ工合。

二つの胴　人體の胴を二つ重ねて置いて一刀のもとに斬ること。試斬の場合に行ふ。

土壇拂　土で築いた壇の上に人體を横たへ一刀のもとに斬るに、これを兩斷して、餘勢で更に土まで拂ふこと。試斬の場合に言ふ。

すると前田侯は、にこやかに兩人を見渡しながら、

「さて興里に尋ねるが、これなる胄を頭に戴く時は、矢丸は言はでもの事と思ふが、太刀にて斬附けられた場合にも、十分にこたへ得るであらうなう。」

「お言葉までも御座りませぬ。いかなる名刀にて斬附けられませうとも、ひゞわれ一つ入る事では御座りませぬ。」

興里はきつぱりと答へた。

「次に貞宗に尋ねるが、これなる太刀の切味はどうぢや。」

「恐ながら二つの胴、土壇拂のたとへも物かは、金鐵をも斷つてお目にかけまする。」

貞宗も大層な意氣込であつた。

「ふむ、然らば貞宗、その方これなる太刀にて、興里の作つた胄を斬割つて見よ。」

色めく　動搖する。

たすき十字　たすき（襷）を十文字にかけること。

「はつ、畏まつて御座りまする。」

貞宗は快くお受けをした。

滿座は色めき渡つた。いかなる名刀でも斬れぬと斷言した興里の胄を、貞宗が見事に斬つて見せようと言ふのだから、こんな興味の深い見ものはない。

胄は床の上に置かれた。貞宗はたすき十字に綾取つて、その前に直ると、太刀振りかざして大上段、滿身の氣合をこめて、今や斬下さうとした一刹那、

「あいや貞宗殿、暫くお待ちなされい。胄が曲つて居りまする。」

聲をかけた興里は、進んで胄の位置を心持直して引込んだ。

貞宗は再び太刀を振りかぶつて、「えいつ」とばかり斬附けたが、刀は刎上げられて、胄はそのまゝであつた。

「こんなはずではなかつたが。」さう思ひながらも、拔いた太刀の

納めやうがないので、うむと一つ意氣込むと、庭前の青銅の大水盤を目掛けて、「えいつ」と斬附ける。大水盤は見事に二つに割れて離れた。

「やいや、〳〵」

君侯の褒言葉に應じて、並みゐる藩士も一度に聲を上げて褒めたゝへた。

かくて興里と貞宗との兩人は、御前の首尾も好く退出する事が出來たのであつた。

その翌日、前田侯は更めて興里、貞宗の兩人を城中に召出し、杯を與へて加州藩の秩祿をもあてがはうとの思召で、城中から迎の者を遣したが、これはまた意外にも、兩人とも昨夜のうちに城下を逐電して、二軒が二軒とも、言合せたやうに空家になつてゐるとの事であつた。

青銅からかね。
水盤底淺く面廣く、丁度大形の皿の形をした器。
首尾も好くなりゆきも好く。都合よく。
秩祿ふち。俸米。
逐電住所を去り跡をくらまして逃げること。出奔。

「それは奇怪至極な事だ」

前田侯は合點がいかぬ樣で、扇を膝に立てた。名作を獻つて譽を揚げた者が密かに夜逃をするとは、前代未聞のさただと思つたからである。

「何か書遺した物でもないか」

近習頭が探らせにやると、果して雙方の空家に一通づゝの書置があつた。

貞宗の方のには、見事胄を斬つてお目にかける自信は持つてゐるのだが、それを斬損じたのは面目ないから、この地を立退くとあつた。

興里の方のには、自分は貞宗が太刀を振りかざした樣子を見て、胄は確かに二つに斬られるものと信じた。そこで胄が曲つてゐるなどと聲を掛けて、貞宗のせつかく張詰めた氣合をそらし

前代未聞これまで聞いたことがない事。空前の事。
近習頭近習の取締をする人。

讀めたわかつた。

(一)滋賀縣彦根市長曾根町。

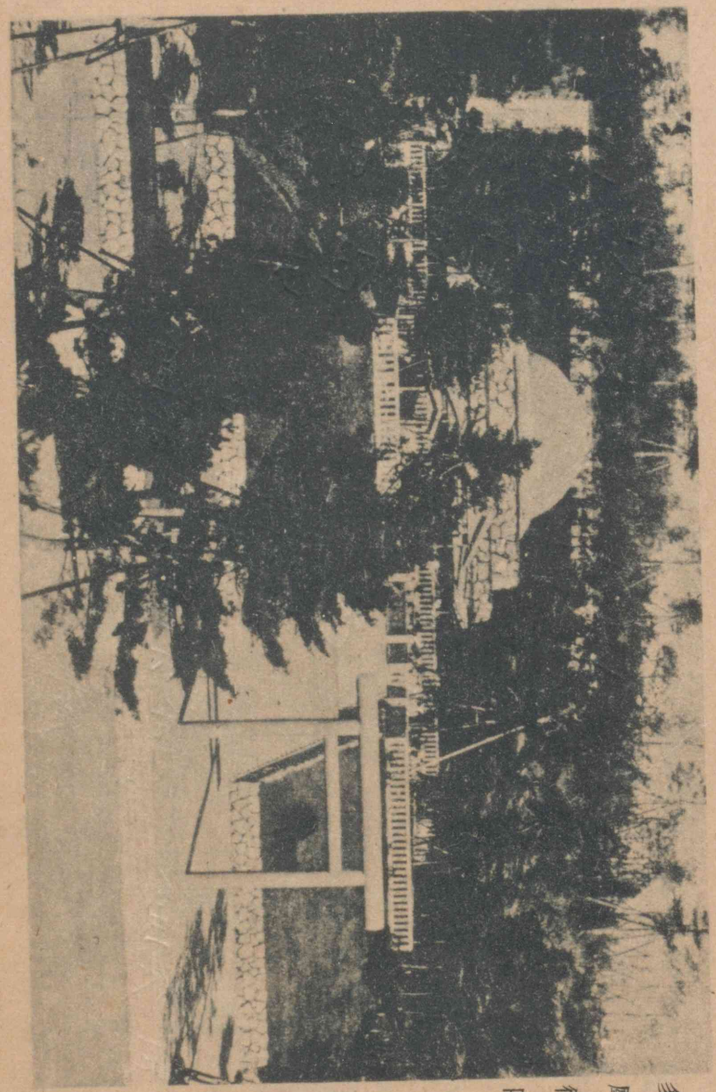
後身境遇が一變化した以後の身。

た。それが爲に胄を斬られる不名譽は免れたが、考へてみると、自分の行爲は甚だ卑怯であつた。面目ないからこの地を立退くといふのであつた。

これで兩人の夜逃の腹の底が始めて讀めた譯である。だが、興里は唯逐電しただけで一時をごまかす男ではなかつた。これが發奮の動機となつて、「貞宗に劣らぬ刀劍の名工になつて見せる」といふ意氣込から、近江の長曾根(ながそね)といふ所に落著いて、刀を鍛へる道に一生を打込んだ。

長曾根虎徹(こてつ)と世に名高い刀工は、實にこの興里の後身だつたのである。

一四　多摩御陵に詣でて

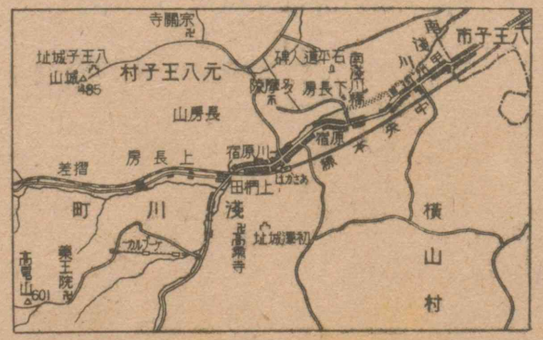


多摩御陵

(一)東京府南多摩郡淺川町。東京の新宿驛から四十三キロメートル。

長い間、私は多摩御陵を拜したいと思ひ續けてゐながら、その機會を得ませんでしたが、今日はとうとうその志を果しました。

中央線の淺川驛(一)でおりるとすぐ甲州街道に出て、東へ約十一二町進み、其所から七間幅の廣い參道を、私は緊張した心持で歩いて行きました。驛から出る乘合自動車もありますが、乘物で御陵近くまで參るといふ事が憚られました。淺川の清流に架けられた南淺川橋を渡つて、北へ進んで行くと、やがて一基の大鳥居を前にして、遙かに高くなだらかな圓い



君臨する

動靜

(一)神奈川縣(相模國)三浦郡葉山町の御用邸。

丘が見えました。これが明治天皇の御治世に次ぐ大正の新時代に君臨せさせ給ひ、御父天皇の御遺業を御繼承あそばされて、世界に於ける我が帝國の地歩を一層進めしめられた大正天皇の神靈が、永へに鎭まります御陵であります。その御一生は、とかくに御病身であらせられたにも拘らず、歐洲大戰といふ世界的大事變に會して、善く我が帝國の進路を定めさせ給うたその御偉業の蹟をしのび奉つて、私は御陵の前に額づいたまゝ、暫く頭を上げる事が出來ませんでした。心を靜めて拜しまつるうちにも、天皇が御療養のため葉山(一)にお出であそばされた當時、今上陛下や皇太后陛下、或は御親子、御兄弟の間がらにあらせられる宮樣方の御動靜

斂葬

玄宮

(一)高松宮宣仁親王殿下。大正天皇の第三皇子。

が、畏くも下々の家庭にも見られない程の御肉親の御情愛に滿ちさせられた御事など、或は天皇の崩御當時、全國民が、今は心を籠めた御平癒の祈願もかひなくなつた悲しみを胸に抱いて、相共に今更のやうに御聖德の數々をしのび奉つて、慰めやうもない切なさを纔かに紛らさうとした事などを思ひ出して、つい眼頭が熱くなつて來たからです。御斂葬の時に秩父、高松(一)の兩御兄弟の宮が、玄宮の御前近くおたたずみになつたまゝ、容易にお立去りにならなかつたと傳へ奉るお話が、またしみ〴〵と回想されました。

大正天皇

漸くに御陵前を退下して稍遠く仰ぎ見ると、兆域二千五百五十平方メートル、かの奈良時代文化の基を開かせ給うた聖德太子の御墓と御形式を同じうしてゐるといふ御陵の近くには、鬱蒼たる常綠樹林や雜木林を帶びた長房山の丘陵が迫つて、物音一つ聞えない閑寂境の上に、白い雲が所浮んでゐます。御陵を後にして遙か前面を望むと、さつぱりとして綺麗な一脈の丘が長く續いてゐます。これは萬葉集に「赤駒を山野に放し」と詠まれて以來、歌の名所として知られてゐる多摩の横山で、今もこの邊一帶の村の名を横山村と呼んでゐます。また遠く眺めますと、快く晴れた西の空に富士嶺の秀麗な姿が望まれ、近くには紅葉の勝地として

(一)第三十一代用明天皇の第二皇子。第三十代推古天皇の御代、西暦一六〇八年。

(二)東京府南多摩郡横山村大字長房。

(三)二十卷。我が國最古の歌集で、第十六代仁德天皇の時から第四十代淳仁天皇の御時頃まで約四千五百の歌を集めてある。撰者は未詳。

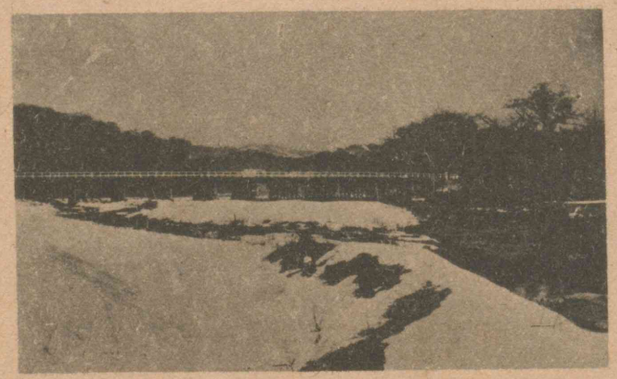
(四)赤駒を山野に放しとりかにて多摩の横山かゆかし（字遲部黒女）

聞えた高尾山が仰がれます。私は始めて見るこの眺望、武藏野の名殘も懷かしいこの山川の勝景に接して、うつとりと暫し立ちつくしました

御父天皇の御血を享けさせられて、和歌の道を好ませ給ひ

ゆたかにも雪ぞ
つもれる秋津洲
めぐりの海は
朝なきにして

また



南淺川橋

(一)淺川驛の西南四キロメートル。全山密林、頂に藏れ、上は眺望が甚だよい。高さ六〇二メートル。

冬ながら垣ねの草も萌出でゝ
たなかのいほの梅の花さく

また

神まつるわが白妙の袖の上に
かつうすれ行くみあかしの影

天來の詩人

など數々の御秀歌をお遺しになつた天來の詩人であらせられる天皇は、靜かな永遠の御まどろみのうちに、この勝景をいかに御心往くばかり御賞美あそばされてゐる事でせう。

まどろみ

御代々の帝都が多く畿内の地に限られてゐた關係上、御陵と申せば、主として山城、大和を中心とする地方に定められてゐたのが、思ひも懸けず奥武藏の地に大正天皇の御陵を拜する事となつたのは、御膝下にゐて御英姿を拜する機會の多かつた帝都の人士に取つては、せめてもの心頼みでせう。

畿内

歸路に就いて、再び南淺川橋を渡りながら顧ると、御陵の邊はもう半ば黄昏れてゐました。秩父おろしの空風は、橋の袂の尾花を一頻り靡かせて、川の面を吹いて行きます。私はしつかりと襟を搔合せて、後髪引かれる思を懷きながら、橋を離れました。

一五　日の丸の歌

西條八十[1]

[1]詩人。早稲田大學教授。明治二十五年（一八九二年）東京市に生れた。

赤は勇氣に燃ゆる色。
白は正義に生くる色。
二つの色に染めわけし
我が日の丸の尊さよ。

赤は朝日の昇る色。
白は泡だつ海の色。
遠く世界を照すなる
國威を語る旗の色。

あゝこの旗の行く所、
敵はなびきぬ草のごと。
あゝこの旗のもとにして、
勇士は死にぬほゝゑみて。

つねに進みて搖がざる
歷史光榮ある日の本を、
國旗のかげに想ふ時、
熱き血潮はをどるかな。

天は晴れたり今日もまた、
門邊に仰ぐ我が國旗。
正大の氣を放ちつゝ
のぼる朝日の美しさ。

——國民詩集——

正大の氣

過去は水に流して行く
手に光明を求める

一六　新年

暦の改ると共に、人は一歳づゝ年を取るのであるが、實際は、そのたびに生れ變つて、若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それをいつまでもくよ〳〵してゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行く手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてそれの好機、卽ち年の改る日である。

我が國には、昔から大祓（おほはらひ）といふ祭式によつて、過去のあら

復活する

春秋に富む
還暦
古稀

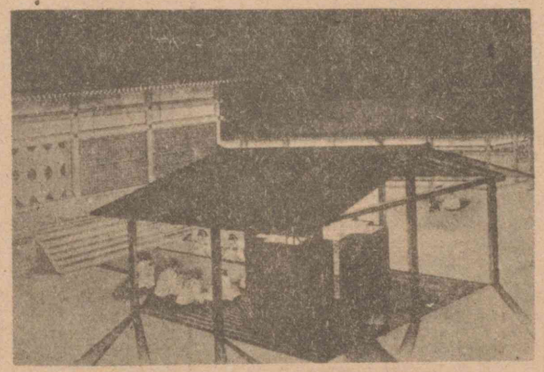
ゆる罪を一掃し、汚れた心をうち棄てゝ復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれるもので、卽ち我が國民は、一年に二回づゝ心身共に新たになつて、復活し來つたのである。この大祓の式は今でも行はれてゐるが、就中十二月は、年も新たになる前であるから、この復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

そこで我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出來るだけ一切の物を新たにし、清くして、形の上にもこの復活の義を表す事に努めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還暦に入り、古稀に達する老人でも、その生れ變る心持には異なる所がない。

簡樸

宗家

正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連縄や、讓葉や、白木の三方や、土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返して行く所に妙味がある。卽ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出して行くのである。祖先から傳はつた掛物を掛けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。



四方拜御儀

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於かせられては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると

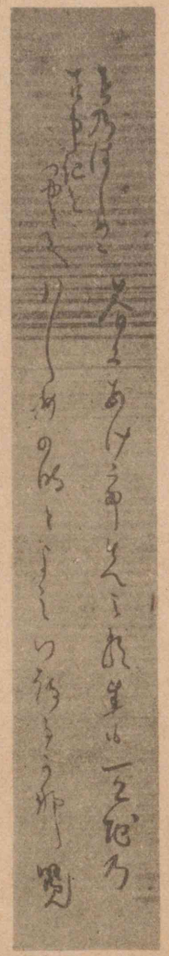
四方拜
元始祭
內外臣僚

(一)歌人。越前の人。明治元年(一八六八年)歿、年五十七。春のはしめに古事記を開きて春にあけて先みる書も天地のはしめの時とよみいつるかな　曙覽

(二)古事記のこと。

(三)伊勢の國學者荒木田守武の作。

同樣に、新年には四方拜や元始祭を行はせられ、また內外臣僚を召させ給ひて拜賀を受けさせられ、御宴を賜ひなどし給ふ。これを思へば、我等は今の世ながら直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずにはゐられぬ。余は橘曙覽(一)の



橘曙覽筆蹟

春にあけてまづ見る書(二)も天地の
はじめの時とよみいづるかな

といふ歌を、早くから深く感心してゐた。これ、かの元朝(三)や神代のこともおもはるゝ

と同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬのである。

一七　五十鈴の流

河野省三[一]

昔西行法師は伊勢の皇大神宮に詣で、坐ろに深い敬虔の念に打たれて、

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

と詠じた。

神路山[二]の翠濃やかに、五十鈴川[三]の流清らかな神境に歩を運び、清々しく神々しい御神殿を千木高く彼方に仰いで、徐

(一)倫理學者、文學博士。國學院大學長。明治十五年(一五四二年)埼玉縣に生れた。

坐ろに

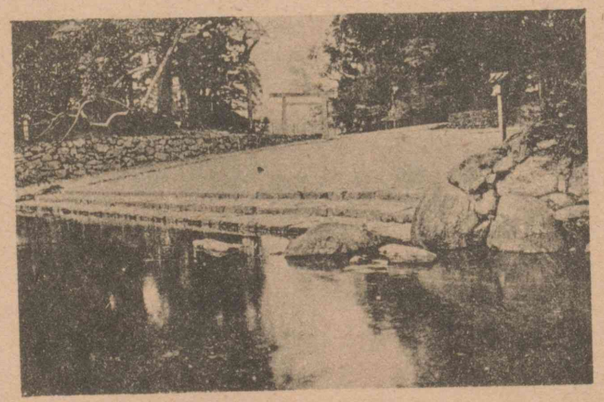
(二)三重縣(伊勢國)度會郡。宇治内宮を繞る鬱蒼たる山林である。

(三)神路山及び島路山に發し、神域内を流れ二見に至つて伊勢灘に注いでゐる。

かに額づき奉る時、誰しも尊さと、畏さと、懐かしさとの氣持が胸に溢れて來るのである。

其所は我が皇祖天照大神を齋き奉る所、遠い昔から皇室と國民と一體となつて崇め奉る所、天壤と共に窮りない我が寶祚と國運とが御裳濯川の流遠く、我等日本民族の心の底を流れ行く信念の舍る所である。

文久元年橘曙覽は此所に參拜して、



五十鈴川

(一)五十鈴川の別名。

(二)第百二十一代孝明天皇の御代。(一八五二年)

おはしますかたじけなさを何事も
知りてはいとゞ涙こぼるゝ

滿腔の感激

といふ一首に、その滿腔の感激を表してゐる。げに神宮の歴史を知る事は、卽ち我が皇室の歴史を知る所以であり、我が皇室の歴史を知る事は、卽ち我が國史の精髓を明らかにする所以である。(一)嘉陽門院越前の歌に、

いすゞ川その水上をたづぬれば
神路のやまにかゝるしら雲

とあるやうに、神宮の御鎭座を究め、その由來を調べてみると、誠に悠久の感慨に入るのである。皇祖天照大神が皇孫瓊瓊杵尊に皇位の御璽として三種神器を親授せられ、天壤無窮の神勅を賜うた時、特にその寶鏡に就いて

(一)鎌倉時代の歌人。第八十二代後鳥羽天皇の皇女。禮子內親王に仕べた。

これの鏡は、もはら我が御魂として、吾が前をいつくがごといつきまつれ。

と、優渥な御言葉を添へられた。爾來歴代の天皇はその御遺訓に基づいて、皇祖の大御心を體し、親しく同殿共床の御儀を以て神器を奉齋せられたのであるが、(一)崇神天皇の御代に、神威の發揚と皇威の發展とに伴なひ、神璽は御傍に留め、寶鏡と靈劍とは、政務の繁劇な宮中から(二)笠縫邑の靈域に遷して、嚴かな神殿を創建し奉つた。

優渥な御言葉

大御心を體す

(一)第十代。

(二)奈良縣磯城郡。

皇祖の神靈を奉齋した神宮には、皇女(三)豐鍬入姫命が恭しく奉仕せられ、更に適當な靈地を求めて丹波、大和、(四)吉備の諸

(三)崇神天皇の皇女。第一代の齋宮。

(四)備前、備中、備後、美作の四國を言ふ。

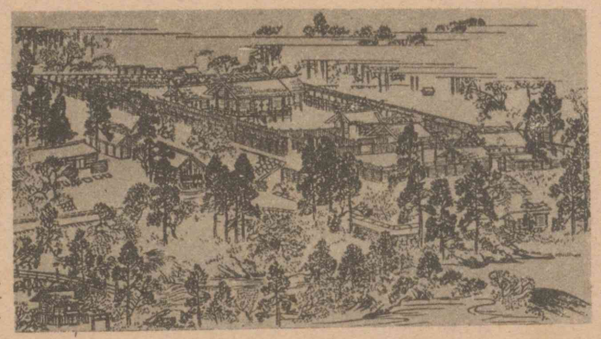
國を巡り、次いで垂仁(一)天皇の皇女倭姫(二)命が代つて齋宮となり、伊賀、近江、美濃の諸國を經て伊勢に出で、その二十六年九月、此所に畏くも五十鈴川の上に宮柱太く千木高く鎭座し奉られた。これ卽ち皇大神宮であつて、宮中に模造して留め奉つた神鏡も、內侍所卽ち賢所として、篤くこれを崇め奉つてゐる。

その後、靈劍は景行(三)天皇の御代に日本武尊の東夷征伐に際して、尾張の國の熱田に遷座せられ、また雄略(四)天皇の二十二年九月になつて、豐受大神の神靈が丹波の國から山田原に迎へられて、皇大神宮卽ち內宮近く奉祀せられた。前者は卽ち熱田神宮であり、後者は卽ち外宮である。豐受大神は大

(一)第十一代。
(二)第二代の齋宮。日本武尊の御姨。今宇治山田市外倉田山上の倭姫宮に祀られる。
(三)第十二代。
(四)第二十一代。

軫念あらせられる

神の御饌都神であつて、蓋し大神が國民の生活に軫念あらせられて、皇孫に齋庭の稻穗を賜はつた神敕に基づいて奉齋せられたのである。皇大神宮の御創立と御奉仕とに功績の多かつた倭姫命は、天資聰明叡智で、後世に及した感化も甚だ深いから、大正十二年の冬に至つて、內宮の別宮として奉祀せられる事となつた。



內宮全景

神宮は內宮、外宮、何れもいはゆる神明造の正殿の後方左右に相對して東西兩寶殿が立ち、瑞垣をはじめ諸の御垣を以て圍まれ、一般には外玉垣南御門の

前で拜し奉るのである。天武天皇(一)の御頃から、二十年目毎に木の香新しく造營し奉る事となつたが、後村上天皇(二)の朝以降、二十一年目毎になつた。

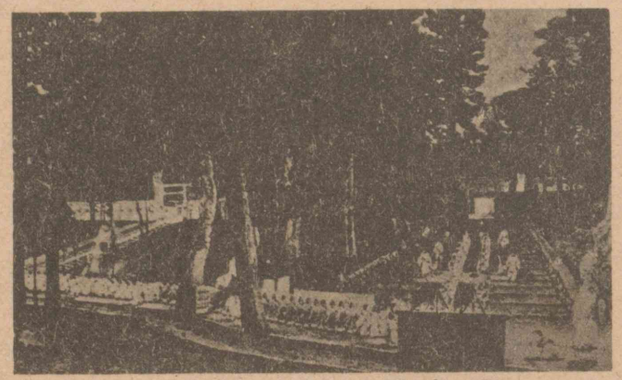
御造營は力めて古來の建築樣式を守り、主として檜材を用ひ、御屋根は茅ぶきとし、彫刻色彩を以て裝飾する事なく、專ら莊重と清淨とを旨としてゐる。明治天皇が神祇といふ御題で

神風のいせの宮居のみやばしら
たてあらためん年は來にけり

とお詠みあそばされたのは、蓋しこの事であらう。式年御造營に際しては、種々のゆかしい祭祀の後、莊嚴盛大な正遷宮

(一)第四十代。
(二)第九十七代。
ふく(葺)

が行はれる。昭和四年十月の第五十八回の遷宮祭には、全國各種團體の代表者もその盛儀に參列して、皇運の無窮と國運の隆昌とを壽いだのである。


式年遷宮式（五姓田芳柳筆）

毎年十月十七日に行はれる國家の大祭日の一たる神嘗祭は、その秋の新穀を先づ皇祖の大神に奉る神宮の御例祭である。齋宮として奉仕された齋內親王は、後醍醐(一)天皇の朝に至つて斷絶したが、明治の御代この方特に神宮司廳を設け、親任の祭主を置かれ、なほ大宮司、

(一)第九十六代。

少宮司、禰宜以下多くの神官が奉仕する事となつた。年中の恒例、臨時の諸祭典は、卽ち上皇室より下國民に至るまで、心を一にして皇祖に奉仕し、以て寶祚の無窮、國運の發展を祈るところの道德と生活との反映であつて、明治天皇の御製に、

神風の伊勢の宮居のことをまづ
　ことしものの始にぞきく

とあそばしてをるのは、全くこの深い大御心に出てをるのである。國民が伊勢參宮を以て一生一度の懷かしい榮ある義務と心掛けてをるのも、全くその國民性に出で、その信念に因るものであつて、上下相俟つて、我が國體の精華を成してゐるのである。されば億兆の國民が皇室を中心として我が皇國に奉仕してゐると同樣に、全國十餘萬の神社も、皆この神宮を中心として、我が神國を守護しつゝあるのである。

我等日本人は五十鈴川の清流に口と手とを清め、心を洗つて廣前に頭を垂れた時、おのづから昭憲皇太后の御歌のこころがしのばれるのである。

神風の伊勢のうちとの宮ばしら
　ゆるぎなき世をなほ祈るかな

廣前

一八　たのしみは

橘　曙覽

たのしみは妻子睦ましくうち集ひ
　かしらならべて物を食ふ時

たのしみは朝起出でゝきのふまで
　なかりし花の咲ける見る時

たのしみは常に見馴れぬ鳥の來て
　軒とほからぬ樹に鳴きし時

たのしみは物識人に稀にあひて
　いにしへ今をかたり合ふ時

たのしみはそゞろ讀みゆく書の中に
　われとひとしき人を見し時

たのしみは三人の子供すく〳〵と
　おほきくなれる姿見る時

たのしみは稀に魚煮て子らみなが
　うまし〳〵といひてくふ時

たのしみは家内五たり五たりが
　風だにひかでありあへる時

たのしみは神の御國の民として
神のをしへを深くおもふ時

一九　勞苦と快樂

憂き事のなほこの上につもれかし
かぎりある身の力ためさん

これは名高い古歌であるが、誰の作ともはつきりした事はわからない。しかし、この歌を口ずさめば、大抵の人間はぐづぐづしてゐられなくなるであらう。そして自分の過去を振返つて、恥づかしさに堪へぬ氣持がして來るであらう。そしてまた憂き事、苦しき事に一種の樂しみと勵みとを見出

口ずさむ

すやうになるであらう。

凡そ仕事と名の附く以上は、どんな仕事でも必ず苦しみの伴なふものである。成功の祕訣は、この事實を覺悟して、仕事その物に眞の興味を見出し、勞苦その物に眞の愉快を覺えるのにある。昔から世に優れた人は、何れも仕事をする事に無限の喜を感じ、勞苦その物にこの上ない幸福を感じた人であつた。イギリスの大政治家グラッドストーン(一)は九十歳近くになつて、

グラッドストーン

「私は勞苦に最大の幸福を發見した。私は若い時分に勤勉の習慣を附けたが、この勤勉の習慣を附けたといふその事

(一)西紀一八〇九年―一八九八年。

餘生

が、勤勉に對する立派な報酬であつた。若い人は、多く休息といふ事をば、努力を中止するといふ意義に解釋するやうであるが、私は眞の休息は、一つの努力から他の努力に移る事だと思ふ。」と言つてゐるが、誠に尊い教訓である。偉大な人々は、決して餘生を安樂に送る爲に勉强するものではない。彼等は勉强する事に快樂を感ずるので、隨つて死ぬまで最大の努力を續けようとする。かのアメリカの發明王エヂソンは、

「私は一つの發明を完成すれば、もうその發明に用がない。多くの人は、發明から來る收入を努力に對する報酬のやうに考へるかも知れぬが、私自身は少くともさうは思はぬ。私の最大の喜は、努力して仕事をする事である。」と言つたといふが、これで考へてみても、偉人の精神の据ゑ所を知る事が出來るであらう。

ラファエル

偉人とか天才とか言はれる人には、生れつきよりも寧ろ勤勉によつて才能を發揮した者が多い。いかによい素質をもつてゐても、捨てゝ置いて光る道理がない。有名な畫家ラファエル(一)をミケランジェロ(二)が批評して、

「彼の偉大は、彼の天才よりも寧ろ彼の勤勉に負ふところが多かつた。」と言つたのは至言である。ラファエルは僅かに

(一)イタリーの畫家。(西紀一四八三年―一五二〇年)
(二)イタリーの彫刻家、畫家、建築家。(西紀一四七五年―一五六四年)

至言

素描

三十七歳で亡くなつたが、それにも拘らず、實に二百八十七枚の繪と、五百以上の素描とを殘した。或人が彼に向つて、

「どうしてこんな偉大な仕事が出來ましたか」と尋ねたら、彼は優しい聲で、

「私は小さい時分から何事をもよい加減にしなかつたのです」と答へたといふ事である。フランスの有名な畫家ミレー[1]も、

「私はすべての少年に向つて、唯働けと忠告するだけである。皆が皆天才になる事は不可能であるかも知れぬが、皆が皆仕事をする事は可能である。どんな天才でも、仕事をしなければ何にもならぬ」と言つてゐる。

[1]西紀一八一四年―一八七五年。

一體、人といふものは、とかく他人の仕事を羨ましがるものである。それはどんな仕事でも、表面は樂なやうに見えるからで、隨つて他人のやつてゐる仕事にたづさはつてみると、始めてその苦しさがわかつて、自分の元の仕事がこひしくなつて來るものである。若しすべての人が、仕事をする事その事に快樂を感ずるならば、仕事の種類は問題でなくなるであらう。だからアメリカの教育家のホレース・マン[1]といふ人も、

「自分の現在の仕事を嫌つて他の仕事に移る人の氣が知れない。私に取つては、仕事をする事その事が、魚の水に於けるやうな關係になつてゐる」と言つてゐる。

[1]西紀一七九六年―一八五九年。

左右する

孜々

毛頭

どんな職業に從事してゐても、その職業は決して人間の品性を左右するものではない。それに從事する人の心の如何によつて、その職業が卑しくもなり、また尊くもなるのである。また職業の爲に手や足を汚染する事は、決してその心を汚染するのではなくして、寧ろ清淨ならしめるのであると言つてもよい。外見の穢い職業に孜々として働いてゐる人の姿を見れば、崇高な感じこそすれ、穢いといふ感じは毛頭しないものである。だからソロモン(一)の箴言にも、

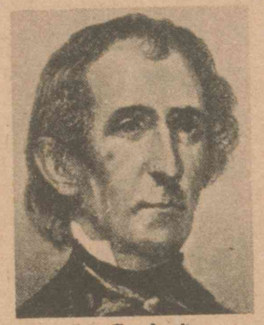
「汝かの事務に勤勉なる人を見ずや。彼は國王の前に立つ事を得べし。」とあつて、いかに勤勉の尊いかを教へてゐるのである。

(一)昔西部アジア(今シリヤの南西部)にあつたイスラエルの王國第三代王明君と名高く、そしてイスラエル世盛時代であつた。(前九三七年—前紀)

平然として

(一)第十四期の大統領。(西紀一八六〇年—一七九〇年)

アメリカ合衆國の大統領(一)タイラーが、任期が滿ちて退職すると間もなく、その政敵は彼を醜弄する積りで、彼をその居村の測量師に選んだ。タイラーは厭がるかと思ひの外、喜んでその職を引受け、しかも一所懸命にその仕事に從つた。これには流石の政敵等も降參して、「もういゝ加減に辭職してはいかゞですか。」と言つた。ずるとタイラーは平然として、



タイラー

「私はどんな仕事でも引受けるが、一旦引受けた以上、決して辭職などは致しません。」と返答したといふ事である。

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を

(一)大學にある句。

統計

種々の危險から遠ざからしめるものである。(一)「小人間居して不善を爲す」と古言にもあるが、小人に限らず、すべて人間といふものは、ぼんやりしてゐる時には、ろくな事を考へるものではない。犯罪學上の統計を見ても、倦怠が各種の犯罪の極めて重大な原因となつてゐるのである。オーウンフェタムは、

「事務のうちに成長しない者は最も下劣な人間だ」と言つてゐるが、私は寧ろ、

「仕事をしない者は最も危險な人間だ」と言ひたいと思ふのである。

何事をするにも、人はとかく仕事を早くし遂げたいと希望するものである。言はゞ成功を急ぐのであるが、これも畢竟するに、勤勉勞苦その物に快樂を發見し得ない爲で、眞に勤勉な人は、一面から言ふと、頗る氣の長いものである。ダーウィンはみゝずの研究に對して、實に前後三十年を費してゐる。文豪ゴールドスミスは、「一日に四行づゝ書けば十分だ」と言つて、名高い「荒村行」を書くのに前後七年を費した。しかも彼はその四行を書くのに一日かゝつて、うん〳〵言つて苦しんだといふ事である。

(一)イギリスの博物學者。進化論、遺傳の法則を唱へた。(西紀一八〇九年—一八八二年)

(二)イギリスの文學者。(西紀一七二八年—一七七四年)

みゝず(蚯蚓)

スミスドルーゴ

急がずばぬれざらましを旅人の
あとより晴るゝ野路の村雨

(一)イギリスの有名な歴史家。ローマに遊んで衰亡の跡を見て、ローマの衰亡史を著した。(西紀一七三七年―一七九四年)

(二)イギリスの有名な探檢家。(西紀一八四一年―一九〇四年)

といふ歌もある通り、成功を急ぐのは、決して成功をもたらす所以ではない。有名なローマ衰亡史を書いたギボン(一)は、その第一章を三度書直して、始めて滿足したと言はれてゐるが、全篇を完成するのに、實に二十五年の歳月を費したのである。

ギボン

人間はいかに努力勉強しても、若し勞苦その物に快樂を覺えるならば、決して過勞といふ現象の生ずるものではない。過勞といふ現象の生ずるのは、畢竟成功を急ぐか、または勤勉勞苦に興味をもたぬからである。それ故アフリカ探檢家のスタンレー(二)卿も

(一)小說家、醫學博士。名は光次。愛知縣の人。昭和四十年、歿。

(二)政治家、學者。農學博士、法學博士。岩手縣の人。昭和八年カナダで客死した。年七十二。

英京　イギリスの首府のこと。

下院　イギリスの議會は上下二院から成る。下院は國民の公選した議員を以て組織される。

「たとひどんなに激しい仕事をしても、しつかりして規則正しく進んで行くならば、決して身體を害するものではない」と言つてゐる。實際若し過勞の爲に病氣になつた人があれば、それはその人が仕事に對して興味を少しももたなかつた證據だと言つてよいであらう。(一)(小酒井不木の文に據る)

自修文

イギリス富豪の犧牲心

新渡戸稲造(二)

英京ロンドンの北方に、世界で一二を競ふチョコレート製造所がある。其所の主人は、長い間イギリス下院の議員として政治方面にも活動し、廣くその名を知られてゐるが、また色々の社會事業や慈善事業にも力を盡してゐる。私は豫てこの主人に一度會つてみたいと思つてゐたが、幸ひにもロンドン滯在中その主人

から招かれたので、悅んでその邸を訪ねた。

私はこれまで幾度となく、イギリスの貴族や富豪の家に招かれた經驗があるので、今ではさういふ人々の住む邸宅の樣子は、一度も訪れないでも大概は想像がついた。――先づ雜沓の市街を避けて曲折した田舍風の廣い道を行くと、宏壯な門がある。その門を入ると、牧場と山林とをつきまぜたやうな、高低起伏のある廣々とした前庭の間を、平たい道が曲線を描いて奧へ〳〵と導く。或は小高い丘に登り、或は谷間のやうな低地に降つて、小流に架けた橋を渡る。やがて古色蒼然たる石造の高樓に達する。玄關に立つと金モールの附いた美服を纏つた家僕が出迎へる。その案内で善美を盡した廣間に導かれる。――これが普通である。

然るに豈圖らんや、このチョコレート王の家は電車道に面した古い煉瓦建で、さして大きくなく、玄關も名ばかりのものであつ

前庭　屋敷内で建物の前方にあるには。

古色蒼然　年を經たおもむきの表れて、見えるさま。

豈圖らんや　意外にも。さして　大して。

た。入口の戸を叩くと、響に應じて現れたのは、十八九の娘さんであつた。女中ではないやうだと思つたが、化粧も施さず、衣服も頗る質素であつた。その娘さんは、「父はまだ事務所から歸りませんが、程なく歸りませうから、どうぞあちらの部屋でお待ち下さい」と言つた。疑もなくこれはこの家の娘である。私が想像に描いてゐたチョコレート王の豪奢な生活は、既にこの時完全に覆された。

私は導かれて二階の客室に通つた。室内を見渡すと、昔私が學生の時代を送つたベルリン(一)の下宿屋の室などよりも、一層簡單なくらゐであつた。壁に懸けてある額を見ても、油繪などは一つもない。主人の親戚かと思はれるやうな人々の寫眞や、著名な繪畫の複製品などがはめられてあるに過ぎなかつた。また椅子や、テーブルや、ソーファ(二)の類も、悉くぢみな古い物ばかりであつた。

暫くして主人が歸つて來た。初對面のあいさつを交した後、主

(一)伯林。ドイツの首府。

複製品　美術品などで一つの原作を素としてそれに似せて作つたもの。

(二)長椅子。寢椅子。

四方山の話　種々な世間話。

小卓　小さなテーブル。

人をはじめ夫人や娘さんたちと、四方山の話に耽つたが、皆そろつて眞心から歡迎してくれる溫かさが感じられて、私は始めて訪れた外國人の家にゐるといふ事も忘れた程であつた。

かれこれするうちに夕食の鐘が鳴つた。食卓に著くと、子供たちを加へて主客十人許、大きな娘さんが唯一人で手づから料理を運んで來て、主人や主婦の傍に備へてある小卓に置く。すると主人や主婦がこれを適當に配つて、少しも女中の手を煩はさない。其所に並べた料理も頗る簡素な物で、唯榮養を取るに足るのを標準としてゐるかのやうに見えた。

食事が濟んでから、書齋でまた色々と話し合つたが、その時主人は「家族が大勢あるので室數は少くないが、近頃一般に石炭を多く用ひる事が禁ぜられてゐるので、火の氣のあるのは食堂とこの部屋だけだ」と說明した。そこで私は「石炭の供給は、家族の人

遇する　もてなす。

逗留する　旅先でしばらくとまりやどる。

數と室數とできめると聞いたが、お宅では家族も多く室數も多いのだから、隨分澤山配給されるでせう」と言つたところが、彼は「規則通りにすれば、今現に配給されてゐる分量の三倍は取れるのですが、世間には、老齡だつたり、病氣だつたりして、人並以上に燃料の入る者の多くあるのを知りながら、權利のみを主張して得られるだけ得ようとするのは、些か憚らなければならない。だから風邪を引かない程度で滿足してゐる。遠來の貴下を遇するのに甚だ不行屆であるが、どうぞ我慢して下さい」と答へた。

私は主人の好意によつて、二三日この家に逗留した。その間、私は事毎にこの家の生活の質素な事を目擊して、驚歎するばかりであつた。從來この主人が、慈善事業や公共事業の爲に大金を寄附したといふ新聞記事を屢、見たが、その度毎に私は、それは金が有餘つてゐるからだらう。さもなければ莫大な利益を得て、その

確認する　たしかにみとめる。

(一)歴史家、文學博士。元臺北帝國大學總長。明治三〇年(一八九七)大阪府に生れた。

中から若干分を割くのだらうとばかり思つてゐたが、數日間の滯在によつて、此所の主人の世の中の爲に差出す金は、一家そろつて粗食し、寒を忍び、虚榮を避け、少からざる犧牲を拂つたものである事を確認した。

私は自分が、僅かの金を世の中の爲に寄附する事でもあると、甚大な犧牲を拂つたやうに感じながら、富豪の出金はさ程でもないやうに思つてゐたが、實はさういふものでない事を目撃し、この家に達するまでの私の想像は全然覆された。さうして辭し去る時には、高樓に招かれて美食に飽いた以上の滿足を覺えた。

—東西相觸れて—

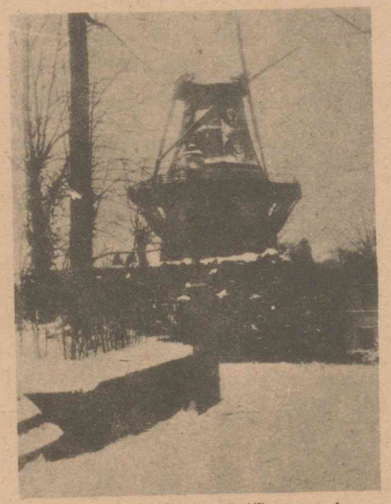
二〇　フレデリック大王と酒井備後守

幣原坦(一)

(一)ドイツの首府ベルリンから西南約三〇キロメートル。風光明媚の地。清楚

(二)フレデリック・ウィリアム一世の嗣。(西紀一七四〇年—一七八六年)

(一)ポッツダムのサンスーシ宮は、(二)フレデリック大王の記念に充ちてゐる。昔大王が此所を居城としてゐた時の事、清楚な境内の樹蔭濃やかな間に、ぎい〳〵と音を立てゝ、靜寂を破る音がした。大王は侍臣に向つて「あれは何の音か」と聞いて、宮門の向ふにある風車の響である事を知られた。



大王の機嫌を損ねた風車

そこで風車の持主に諭して、これを取去らせる事にした。

ところが持主が言ふに、「この風車は私が先祖から傳へられた唯一の財産で、一家はこれによつて漸く生計を立てゝ

路頭に迷ふ

居ります。今これを取去られては、忽ち路頭に迷はねばなりません。それでも是非取去れとの仰ならば、一應公平な裁判を受けたいと思ひます」。

(一)佐倉藩士澁井德章の編著。四十二卷。江戸時代の賢臣の善言嘉行を諸書につて集錄したもの。

(二)新井白石の著。十三卷。一萬石以上の諸侯家の三百三十七家の傳記沿革等を記したもの。

(三)德川家康の重臣。正親の第三子で備後守と稱し、武藏川越城に居つた。寛永四年(一六二七年)歿、年六十六。

備臣は大いに腹を立てた。大王は笑ひながら、「そのまゝにしておけ」とばかりで、一向咎めもなさらなかつた。當時の人はこれを聞いて、大王の寛仁大度に感じたといふ。これは有名な話で、今にその風車も保存されてゐる。

あながち

しかし、あながちそのやうな話に、日本人は感心する程の事はない。足下を見れば、それと同じやうな、なほそれよりも美しい話が隨分ある。責而者(せめて)艸卷の十一に藩翰譜(はんかんぶ)を引いて酒井忠利(三)の事を述べて、次のやうに言つてゐる、

年貢公役かりそめにも

酒井備後守忠利の領内に、備後といふ百姓があつた。忠利の家來はその百姓を呼んで、「お前はこの領内に住んでゐながら、殿樣と同じ名を冒してゐるのは不都合であるから、早速改名するがよい」と言つた。百姓はこれを聞いて、歎いて言ふに、「私は人よりも一層早く年貢を納め、月々の公役をば、かりそめにも怠つた事はありません。さうして永く此所に住みつきまして、代々備後と名のり、正直者の備後で通つて居ります。今これを改名せよと仰せられましても、俄にはかなひません。何とか殿樣の御名を改めて戴く譯には參りますまいか」。

家來は大いに腹を立てた。忠利はこれを聞いて、「よし〳〵。

神妙の至

苦しうない

年貢をよく納めて公役を怠らないのは、神妙の至である。さらば彼はそこの備後であるぞ。そのまゝで苦しうない。」

徳川家康がこれを漏聞いて、「世間の愚かな人は、何でもない事に人を苦しめて、己の威を立てようとし、無益な事に拘つて、有用な利を失ふものである。然るに忠利は天性和やかにして、仁愛の情深く、智慧もまた少くない。彼の子孫は必ず繁榮するに相違なからう。」と褒めたといふ。

包容愛撫する

符節を合する

稱揚する

この東西の二つの話は、事實こそ多少違ふけれども、寛仁大度の明君が、正直な民を包容愛撫する麗しさは、恰も符節を合するが如くである。フレデリック大王の事蹟は世界の人に稱揚されて、備後守の事蹟はこれを知らぬ人が多い。自分はフレデリック大王を宣傳する前に、備後守を世界に顯彰したいと思ふのである。

宣傳する

顯彰する

二一　人を恐るな天を恐れよ

大町桂月[一]

——世界の變遷を見る——

(一)文學者。名は芳衛。高知市の人。大正十四年歿、年五十七。

運は人を恐るゝ人を去つて、天を恐るゝ人に來る。地震、雷、火事、親爺を恐しき者とせしは昔の事なり。父豈恐しき者ならんや。唯父の恐しきは、父の命を守らざる所あればなり。己に曲りたる所あれば、父のみならず、先生も恐し。朋友も恐し。世間の人皆恐し。己正しければ、何人も恐しくなきはずなり。

されど、人には鼻つばりの強き者と弱き者とあり。鼻つばりの強き人は恐るべきを恐れず、弱き人は恐れずともよき

生存競爭

事を恐る。世の小人は、常に人の弱味に附込みて勝手なる事をするものなり。餘りに鼻つばりの強きに失するも非なれど、弱きに失するもまた非なり。弱きに失しては、いかに正しくとも、生存競爭の劇しき世の中、運を人に取られてしまふべし。

岡部丹波守はいはゆる鼻つばりの強き人なりき。されどその心正しく、よく道理を解するを以て、人これに加ふる事能はざりき。

老中と言へば、大抵の者は恐しがりたれど、丹波守のみは然らず。不得心の事あれば、老中をも憚らざりき。

松平伊豆守は老中の中の智者なり。人の言ふ事に不同意なれば、直ちに可否は言はず、「耳に聞えかねたれば、今一度承りたし」と言ふに、人多く閉口せり。

笑止千萬

或時丹波守、組中の事に就き伊豆守に談判せしに、例の筆法にて「今一度」を持出す。丹波守色を正しうして曰く、「こは笑止千萬の事なり。抑老中は天下の善惡を判斷して、これを賞罰するの職なり。然るに耳惡しくして、一度聞きてわからぬやうにては危しとも危し。その危きを顧ずして老中の職にあるは、不覺と言ふべし。今我が申し陳べたる事は、天下の大事にはあらざれども、我に取りては事小にあらず。耳惡しくては、今一度言ふとも聞違なきを保せず。再び申すべきにあらず、他の老中に開陳せん」とて立退く。流石の伊豆守もこれ

開陳す

には閉口し、丹波守の袂を控へ、「いや、それ程までに耳惡しきにあらず。念の爲にと思ひたるなり。只今申されし事、大方は聞屆くべし。何とてそのやうに氣が短きぞ」と折れて出でければ、丹波守心解けて引返せり。かくて丹波守は要領を得たるなり。

要領を得る

人は敬すべし。愛すべし。妄りに恐るべからず。唯天は恐れざるべからず。天を恐るとは、我が良心に背かざる事なり。惡事を爲す者は、誰も初には善き事とは思はざるべし。惡しき事と知りつゝ惡事を爲す事のたび重なれば、終に良心麻痺して、惡事を惡事と思はざるやうになるべし。恐るべし。良心一たび麻痺すれば、知らず識らず墮落のどん底に陷るべし。運もめちや〳〵なり。

良心麻痺す

餘りに有名なるが、楊震(一)の四知を聽け。後漢(二)の楊震、東萊(三)の太守となりて任に就く。途昌邑(しやういよ)を經て宿す。邑の令王密は、もと震の推擧せる者なり。迎へて謁見し、夜に入りて十金を懷にして震に贈る。震曰く、「我は君の人となりを知る。君何ぞ我を知らざるや」と。密曰く、「暮夜なり、知る者なし」と。震曰く、「天知る。神知る。我知る。子知る。何ぞ知る者なしと言はんや」と。密大いに恥ぢて去れり。

——桂月全集——

(一)後漢の學者、德行家。關西の孔子と稱せられた。
(二)光武帝劉秀の建國。十二主百九十六年で秦に滅された。
(三)今山東省掖縣に屬する。

二二　地獄極樂

塚原澁柿園(一)

品川東海寺の澤庵(二)和尚は、道德高く、眼識また明らかなれば、諸人尊び敬ふ事限りなし。その頃旗本に水野十郎左衛門(四)といふ者あり、これを聞きて言へるは、「何條澤庵なればとて、いかでさる學德あるべき。人々餘りに尊信して賞めたゝふる故、圖に乘りて樣々の事を言ふならん。我出で會ひなば頭からやりこめて、なか〳〵口は開かすまじ」と、常に腕を扼せられけり。さる程に、或日圖らず澤庵に會ひければ、水野てぐすねして問ひけるやう、「地獄、極樂は實にあるものかなきものか」。澤庵答へて曰く、「我もまた知らぬなり」。水野問ふ、「その有

(一)歴史小說家。名は靖。舊幕臣。江戸の人。大正七年六十。歿。
(二)東京市品川區北品川にある臨濟宗の寺で、澤庵和尚が命を奉じて寛永八年(一六三一)に開創した。
(三)臨濟宗の高僧。俗名は平宗彭。但馬の人。將軍家光の信任が厚かつた。正保二年(一六四五)寂、年七十三。
(四)名は成之。不羈で、暴を恣にし、結黨を組んで、亂暴狼藉し、俠客幡隨院長兵衛を殺し、その徒に復讐せられ、閉口事幕府にせえ、寛文四年(一六六四)死。三二年を賜はつた。

後生を願ふ

無も知れざるに、後生を願へと勸むるは何事ぞ」。澤庵曰く、「貴所は雨降の日他出せらるゝに、そのしたくはいかにし給ふ」。水野言ふ、「從者に傘をさしかけさせ、合羽を著て、馬上にて出づるなり」。「然らば從者の方々はいかに」。「從者もまた笠、合羽にて我に從ふなり」。「然らば晴の日はいかに」。「笠も合羽も用ひぬなり」。「若し急に雨降來らばいかに」。「その用意にとて、雨具籠を持たすなり」。「雨具籠を持たせられても、雨降らざる時はいかに」。「降らざる時は唯持たせて歸るなり」。「降らざるに豫て持たしめらるゝは無益ならん」。水野笑つて「降ると降らぬとが最初より知らるればその世話はなけれども、知らざればこそ、無益になりてもその籠を持たすなれ」と言ふ。

時に澤庵曰く、「その儀なり。後生を願ふもそれに同じ。地獄、極樂の有無は初よりしかとは知れねども、なしと思ひて若しありたる時ははたと困る故、困らぬ用心に豫てより願ふなり。あると思ひてなき時は、無益になるともせん方なし」とありければ、我慢の水野も、尤もとて閉口せられけり。

二三　春は來ぬ

島崎藤村[1]

春は來ぬ。春は來ぬ。
初音やさしき鶯よ、
去歳に別れを告げよかし。
谷間に殘る白雪よ、
はうむりかくせ去歳の冬。

[1] 詩人、小說家。名は春樹。明治五年（一二五三年）長野縣に生れた。

春は來ぬ。春は來ぬ。
寂しく寒く言葉なく、
貧しく暗く光なく、
みにくゝ重く力なく
悲しき冬よゆきねかし。

春は來ぬ。春は來ぬ。
淺みどりなる新草よ、
遠き野面を描けかし。
咲きては紅き春花よ、
樹々の梢を染めよかし。

春は來ぬ。春は來ぬ。
霞よ、雲よ、ゆるぎ出て、
凍れる空を暖めよ。
花の香送る春風よ、
眠れる山を吹きさませ。

春は來ぬ。春は來ぬ。
春をよせくる朝潮よ、
葦の枯葉を洗ひ去れ。
霞に醉へる雛鶴よ、
若き朝の空に飛べ。

春は來ぬ。春は來ぬ。

憂の芹の根を絶えて、
凍れる涙いまいづこ。
積れる雪の消失せて、
けふの若菜と萌えよかし。

—藤村詩集—

二四　伸びて行く力

小林一郎[1]

若い人はたのもしい。若い人は伸びて行く力をもつてゐる。この伸びて行く力が國の寶である。世の寶である。何物もこの力を遮る事は出來ない。すべての幸福と光榮とがこの中から生れ出る。

偉人はいつまでも若い人である。いつまでも伸びて行く

(一)哲學者。中央大學教授。明治九年(二五三六年)東京市に生れた。

力を失はぬ人である。若い人の眼にはすべての物が新しく見える。若い人の耳にはすべての聲が新しく聞える。新しい物は貴い。新しい聲は美しいこれを讃歎し、これを討究する。此所に進歩があり、希望がある。

討究する

かしの實の一粒を地の中に埋めて置く。暖かい日の光が絶えずその上を照してゐる。かしの實は日の光に招かれて新しい芽を出す。この芽は堅い大地を裂いて、ずん〳〵と伸びて行く。青い空の方へ、麗しい日の方へと伸びて行く。若い人の心が卽ちこれである。

何事かを知りたい。何事かを爲したい。これが若い人の心である。若い人の心はいつも青い大空の果から招かれてゐる。さうしてずん〳〵と伸びて行かなければ止まない。この心のいつまでも續く者が偉人である。偉人は死ぬまで若い人である。

世界は常に若く、常に新しい。天地の間は創造の力に充ちてゐる。よく眼を見張つて眺め、よく耳を澄して聽けば、いつでも新しい物がある。いつでも新しい聲が聞える。我等の前にはいつでも知るべき事があり、爲すべき事がある。

人生に興味をもたぬ人がある。それは自分で自分の力を限り、自分で自分の境界を狹くした人である。眼の前の小さい利害損得に囚はれてしまへば、伸びて行く力はなくなる。芽を伸す事の出來ぬ木は枯れる。人もまたそれと同じ事で

あくせく（齷齪）

ある。

頭にはまだ白髪も生えぬうちに、心は老い朽ちた人が少くない。彼はいつも小さい問題にあくせくとして、勝つ事を求め、得る事を貪つて居り、負ければ悲しんで泣くが、勝つても復讎を恐れて、その心は安らかでない。失へば落膽するが、得てもまた失はん事を恐れて、その心は靜かでない。

かくして、疲れ〳〵て、人生の路をとぼ〳〵と歩いてゐる。かくして百年の壽を保つたとて、何の意味があらう。これは生きてゐるのではない。死んでゐるのである。朽ちてゐるのである。その身體は魂の脱殼である。その脱殼をきらびやかな著物に包み、廣い部屋の中に置いたとて、何の意味があら

う。

我等の頭の上には涯りない空が廣がつてゐるではないか。我等の心もまた涯りないまで伸びて行くべきである。力を振へばその力がまた新たなる力を生む。日に〳〵新たなる活動が續けば、日に〳〵新たなる希望が涌く。是に不斷の悦がある。

我等はいかなる境遇にあつても、常に自由でなければならない。境遇に制せられず、自ら境遇を制して行くのが眞の生き方である。富むもよい。貧しいのもよい。富める人に適した仕事もある。貧しい人に適した仕事もある。顯れてもよい。隱れてもよい。顯れた働にも價値がある。隱れた働には更に

世に時めく

價値がある。

偉人とは世に時めく人の事ではない。いかなる場所に置かれても、意義ある生涯を作つて行く人の事である。利害の爲でなく、損得の爲でなく、自分の心の伸びて行く力に滿足を感ずる人の事である。かゝる人は常に創造をしてゐるのである。常に世を新しくしてゐるのである。

伸びて行く力をもつ若い人はたのもしい。その力をいつまでも失つてはならない。身體は老いても、心はいつも若くてあるべきである。

帝國實業讀本　改制新版　卷二　終

附錄

一 五十音圖
一 口語動詞活用表
一 口語助動詞活用表
一 口語形容詞活用表
一 口語形容動詞活用表
一 誤り易い口語動詞の語尾
一 誤り易い口語形容詞・形容動詞の語尾
一 誤り易い口語助動詞
一 通用字と正字・同字異同別對照表
一 宛字

五十音圖

(ア行) (カ行) (サ行) (タ行) (ナ行) (ハ行) (マ行) (ヤ行) (ラ行) (ワ行)		
ア カ サ タ ナ ハ マ ヤ ラ ワ	あかさたなはまやらわ	ア段
イ キ シ チ ニ ヒ ミ リ イ	いきしちにひみりい	イ段
ウ ク ス ツ ヌ フ ム ユ ル ウ	うくすつぬふむゆるう	ウ段
エ ケ セ テ ネ ヘ メ レ エ	えけせてねへめれえ	エ段
オ コ ソ ト ノ ホ モ ヨ ロ ヲ	おこそとのほもよろを	オ段
(ガ行) (ザ行) (ダ行) (バ行) (パ行)		
ガ ザ ダ バ パ	がざだばぱ	ア段
ギ ジ ヂ ビ ピ	ぎじぢびぴ	イ段
グ ズ ヅ ブ プ	ぐずづぶぷ	ウ段
ゲ ゼ デ ベ ペ	げぜでべぺ	エ段
ゴ ゾ ド ボ ポ	ごぞどぼぽ	オ段

附錄

口語動詞活用表

種類	行名	例語	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	カ	聞く	聞(キ)	か	き	く	く	け	け
四段	ガ	騒ぐ	騒(サワ)	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段	サ	貸す	貸(カ)	さ	し	す	す	せ	せ
四段	サ	害す	害(ガイ)	さ	し	す	す	せ	せ
四段	タ	打つ	打(ウ)	た	ち	つ	つ	て	て
四段	ナ	死ぬ	死(シ)	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
四段	ハ	問ふ	問(ト)	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段	バ	飛ぶ	飛(ト)	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段	マ	踏む	踏(フ)	ま	み	む	む	め	め
四段	ラ	乗る	乗(ノ)	ら	り	る	る	れ	れ
四段	ラ	有る	有(ア)	ら	り	る	る	れ	れ
四段	ラ	蹴る	蹴(ケ)	ら	り	る	る	れ	れ
上一段	カ	着る	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
上一段	カ	生きる	生(イ)	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
上一段	ガ	過ぎる	過(ス)	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ(ろ)
上一段	ザ	案じる	案(アン)	じ	じ	じる	じる	じれ	じよ(ろ)
上一段	タ	落ちる	落(オ)	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ろ)
上一段	ダ	恥ぢる	恥(ハ)	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ(ろ)
上一段	ナ	煮る	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	によ(ろ)
上一段	ハ	干る	(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)
上一段	ハ	强ひる	强(シ)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)
上一段	バ	延びる	延(ノ)	び	び	びる	びる	びれ	びよ(ろ)
上一段	マ	見る	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)
上一段	マ	試みる	試(コヽロ)	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)
上一段	ヤ	射る	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ(ろ)
上一段	ヤ	悔いる	悔(ク)	い	い	いる	いる	いれ	いよ(ろ)
上一段	ラ	懲りる	懲(コ)	り	り	りる	りる	りれ	りよ(ろ)
上一段	ワ	居る	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ(ろ)
下一段	ア	得る	(得)	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)
下一段	カ	受ける	受(ウ)	け	け	ける	ける	けれ	けよ(ろ)
下一段	ガ	投げる	投(ナ)	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ(ろ)
下一段	サ	失せる	失(ウ)	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(ろ)
下一段	ザ	交ぜる	交(マ)	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ(ろ)
下一段	タ	捨てる	捨(ス)	て	て	てる	てる	てれ	てよ(ろ)
下一段	ダ	出る	(出)	で	で	でる	でる	でれ	でよ(ろ)
下一段	ナ	連ねる	連(ツラ)	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ(ろ)
下一段	ハ	数へる	数(カゾ)	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ(ろ)
下一段	バ	述べる	述(ノ)	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ(ろ)
下一段	マ	染める	染(ソ)	め	め	める	める	めれ	めよ(ろ)
下一段	ヤ	越える	越(コ)	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)
下一段	ラ	流れる	流(ナガ)	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ(ろ)
下一段	ワ	植ゑる	植(ウ)	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ(ろ)
カ變		來る	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ變		爲る	(爲)	せ し	し	する	する	すれ	せよ しろ

口語助動詞活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ れろ
受身	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ られろ
可能	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	
可能	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	
使役	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ せろ
使役	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ させろ
打消	ない		なく	ない	ない	なけれ	
打消	ぬ		ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	
過去及び完了	た	たら		た	た	たら	
推量	らしい		らしく	らしい	らしい		
推量	う			う	(う)		
推量	よう			よう	(よう)		
推量	まい			まい	(まい)		
希望	たい		たく	たい	たい	たけれ	
希望	たがる	たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ	
敬譲	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	
敬譲	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	
敬譲	ます	ませ	まし	ます(まする)	ます(まする)	ますれ	(ませ まし)
指定	だ	だら	だつ	だ	(な)	なら	
指定	です	でせ	でし	です			
比況							

口語形容詞活用表

種類	例語	語幹	語尾 未然	連用	終止	連體	假定	命令
(ク活用)	高い	高(タカ)		く	い	い	けれ	
(シク活用)	新しい	新(アタラ)し		く	い	い	けれ	

口語形容動詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
第一種	高(タカ) 新(アタラ)し	から(ウ)	かつ(タ)				
第二種	靜か 丁寧	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	な	なら(バ)	

誤り易い口語動詞の語尾

種類	正シイ假名	誤リ易イ假名
ハ行四段	言はない。言はう。 言ひたい。言ひます。言ひながら。 面白く言ふ。言ふ人。 言へば。面白く言へ。 言うて。言うた。	わ い、ゐ う え、ゑ ふ

（類語）扱ふ 洗ふ 爭ふ 誘ふ（いさなふ） 祝ふ 失ふ 歌ふ 疑ふ 占ふ 奪ふ 敬ふ 負ふ 追ふ 行ふ 思ふ 補ふ 飼ふ 買ふ 叶ふ 通ふ 競ふ 嫌ふ 食ふ 狂ふ 請ふ 慕ふ 從ふ 吸ふ 救ふ 添ふ 揃ふ 使ふ 問ふ 整ふ 伴なふ 習ふ 匂ふ 縫ふ 願ふ 拭ふ 這ふ 計らふ 拂ふ 拾ふ 舞ふ 惑ふ 迷ふ 向かふ 貰ふ 養ふ 雇ふ 結（ゆ）ふ 醉ふ 煩ふ 笑ふ 等

種類	正シイ假名	誤リ易イ假名
マ四行段	進んで。進んだ。	む。

（類語）編む 歩む 勇む 痛む 營む 產む 羨む 噛む 屈む 悲しむ 刻む 組む 汲む 苦しむ 込む 沈む 進む 深む 賴む 樂しむ 縮む 摘む 謹む 富む 惱む 盜む 飲む 望む 勵む 踏む 病む 休む 讀む 拜む 惜しむ 等

種類	正シイ假名	誤リ易イ假名、二、類語
ハ行上一段	强ひない。强ひよう。 强ひて。强ひた。强ひたい。强ひます。 强ひながら。 强ひる。强ひる時。 强ひれば。强ひよ。强ひろ。	一、い、ゐ。 二、生（お）ひる。戀ひる。用ひる。
ヤ行上一段	報いない。報いよう。 報いて。報いた。報いたい。報います。 報いる。報いる時。 報いれば。報いよ。報いろ。	一、ひ、ゐ。 二、悔いる。老いる。 い（射）る、い（鑄）る。
ワ	率ゐ（居）ない。率ゐよう。	一、ひ、い。

種類	正シイ假名	一、誤リ易イ假名　二、類語
ア行下一段	え(得)ない。えよう。 えて。えた。えたい。えます。 える。える人。 えれば。えよ。	一、ゑ。 二、心得る。
ワ行下一段	植ゑない。植ゑよう。 植ゑて。植ゑた。植ゑたい。植ゑます。 植ゑる。植ゑる時。 植ゑれば。植ゑよ。植ゑろ。	一、え、へ。 二、飢ゑる、飢かつゑる、据すゑる。
ヤ行上一段	率ゐて。率ゐた。率ゐたい。率ゐます。 率ゐながら…。 率ゐる。率ゐる人。 率ゐれば。率ゐよ。率ゐろ。	二、ゐ(居)る、用ゐる。 ○「用」は「ハ上一」にも。

誤り易い口語形容詞・形容動詞の語尾

ヤ行下一段	絶えない。絶えよう。 絶えて。絶えた。絶えます。絶えながら… 絶える。絶える時。 絶えれば、絶えよ。絶えろ。	一、へ、ゑ。 二、癒える。覺える。消える。聞える。越える。肥える。榮える。聳える。生はえる。冷える。殖える。吠える。見える。燃える。
ハ行下一段	考へない。考へよう。 考へて。考へた。考へたい。考へます。 考へる。考へる人。 考へれば。考へよ。考へろ。	一、え、ゑ。 二、與へる。誂へる。訴へる。押へる。衰へる。換へる。數へる。構へる。加へる。拵へる。答へる。支へる。從へる。添へる。揃へる。堪たへる。貯へる。湛たへる。携へる。譬へる。仕へる。傳へる。調へる。唱へる。控へる。迎へる。辨へる。終へる。

種類	正シイ假名	一、誤リ易イ假名　二、類語
ク活	たか(高)うございます。 あさ(淺)うございます。 かた(堅)うございます。 あぶな(危)うございます。 こは(剛)うございます。 うま(甘)うございます。 はや(早)うございます。 から(辛)うございます。 よわ(弱)うございます。	一、こ。　二、赤い。暖い。近い。深い。短い。若い。長い。苦い。 一、そ。　二、煩い。臭い。 一、と。　二、冷い。めでたい。 一、の。　二、忝い。穢い。少い。無い。 一、お、を。　二、淡い。 一、も。　二、狹い。 一、よ。 一、ろ。　二、荒い。暗い。 一、お、を。
シク活	新しうございます。	一、しゆ。 二、怪しい。勇ましい。嬉しい。欲しい　等
形動第一種	廣からう。	一、かろ 二、高からう。堅からう。重からう　等。

誤り易い口語助動詞

種類	正シイ假名	紛レ易イ假名
形動第二種	靜かだらう。 丁寧だらう。 靜かでせう。 丁寧でせう。	一、だろ。 二、明かだ。穩かだ。朗かだ。柔かだ。はでだ。ちみだ。 丈夫だ。立派だ。結構だ。急だ。變だ 妙だ　等。 一、でしや。でしよ。 二、明かです。丈夫です　等。
「う」「よう」及び	雨が降らう。早く行かう。 誰か居よう。誰か來よう。 どうしようか。勉强しよう。	ふ。 やう。よふ。 しやう。しよふ。せう。 ○「ませう」と言ひかへ得る。 「ヨー」は「よう」。

そ の 連 語	あれは學校だらう。 あれは學校てせう。 學校へ參りませう。 足りなからう。 讀みたからう。	だろう。だろふ。だらふ。 でしやう。でせふ。 ましやう。ませふ。 なかろう。なかろふ。 たかろう。たかろふ。
「せる」「させる」の活用	昨日は君も行つたらう。 掃除は濟んだらう。	たろう。たろふ。たらふ。 だろう。だろふ。だらふ。
	言はせない。言はせよう。 言はせて。言はせた。言はせたい。 十分言はせる。言はせる時。	さない。さう。 し。 す。
	受けさせて。受けさせた。受けさせたい。 試驗を受けさせる。受けさせる時。	さし。 さす。
接續	來させる。	きさせる。
	運動しない。 運動せぬ。	運動せない。
	正直でなければならない。 正直でなければならぬ。	正直であらねばならぬ。
	誰もこ(來)まい。 散歩しまい。	きまい。 すまい。せまい。

通用字及び正字對照表

（茲には其の主なるもののみを擧げた）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
両	兩	効	効	冠	寇	挿	插	潤	閏
仮	仞	即	卽	寶	寶	擯	擯	潛	潛
侫	佞	郷	鄕	尅	剋	攢	攢	陰	陰
免	免	郷	鄕	帽	帽	携	攜	頤	頤
兎	兔	厨	廚	并	幷	整	整	秘	祕
冒	冒	廏	廐	屏	屏	既	既	猪	豬
決	決	収	收	稟	稟	昂	昂	猫	貓
況	況	叙	敍	往	往	晋	晉	玄	玄
準	準	唇	脣	恒	恆	桿	杆	瑣	瑣
涼	涼	器	器	慨	慨	概	概	畫	畫
減	減	噴	噴	憩	憩	欵	款	留	留
函	函	場	場	懺	懺	殲	殲	暑	略
刃	刃	塚	冢	戯	戲	氷	冰	痴	癡
剪	翦	墻	牆	拿	拏	温	溫	鼓	鼓
劒	劍	寃	冤	抜	拔	濵	濱	盃	杯
縮	縮	花	華	衽	袵	谿	溪	遁	遯
船	船	荒	荒	訛	譌	踪	蹤	鉾	矛
櫓	櫓	虱	蝨	譁	嘩	躙	蹂	錆	鏽
駈	驅	雁	鴈	雞	鷄	繊	纖	纏	纏
腸	腸	崩	萌	讖	讖	輙	輒	鬪	鬪
罰	罰	致	致	蔭	蔭	讐	讐	隣	鄰
群	羣	皐	皐	衛	衛	象	象	鎖	鎖
羨	羨	舗	鋪	褒	褒	賓	賓	間	閒
恥	恥	館	館	覇	覇	賛	贊	隙	隙
聖	聖	艶	艷	解	解	贋	贋	隷	隸
脈	脈	葬	葬	記	記	軟	輭	駄	駄
闘	鬪	腸	腸	崩	萌	讖	讖	輒	輒
鬱	鬱	罰	罰	致	致	陰	陰	讐	讐
隣	隣	鄰	鄰	鎖	鎖	間	閒	隙	隙
隷	隸	鬱	鬱						

同字表（どちらを用ひてもよい）

厠	廁	万	萬	並	竝	亡	亾
婚	婚	考	攷	概	槩	砧	碪
厠	廁	婚	婚	考	攷	概	槩
厠	廁	婚	婚	考	攷	概	槩
厠	廁	婚	婚	考	攷	概	槩
厠	廁	婚	婚	考	攷	概	槩
厠	廁	婚	婚	考	攷	概	槩
厠	廁	婚	婚	考	攷	概	槩

斯	廝	岳	嶽	普	普	朴	樸
並	竝	叶	協	峨	峨	村	邨
亡	亾	区	嚙	嚙	峯	峰	柿
京	亰	坂	阪	嶋	島	案	按
俟	竢	野	埜	庵	菴	基	碁
京	亰	坂	阪	嶋	島	案	按
俟	竢	野	埜	庵	菴	基	碁
俟	竢	野	埜	庵	菴	基	碁
俟	竢	野	埜	庵	菴	基	碁
俟	竢	野	埜	庵	菴	基	碁
俟	竢	野	埜	庵	菴	基	碁
俟	竢	野	埜	庵	菴	基	碁

稿	藁	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜

畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜
畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜	畜

*亙（コウ・クワン）
ワタル。「連亙」
桓ニ同ジ。

*体（ホン・タイ）
體
笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。
カラダ。

*但（タン・シヨウ・シ）
タヾシ、タヾ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。

*僭（セン・ナツ）
ミダリガハシ、猥。
自分ヲ越エテオゴル。「僭越」

*冑（チウ・ナウ）
カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

*亘（コウ・クワン）
本來ハ異字デアルガ同字若シクハ略字トシテ往々混用サレルモノ。其ノウチ*標ヲ附シタ文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バナイ

羈	羇	縮	縮	花	華	衽	袵
船	船	荒	荒	訛	譌	踪	蹤
虱	蝨	譁	嘩	躙	蹂	錆	鏽
駈	驅	雁	鴈	雞	鷄	繊	纖
協	協	刺	刺	台	臺	後	后
姫	姬	壺	壺	商	商		

*協（ケフ・カナフ）
カナフ、叶。
オビヤカス。脅。

*刺（シ・セキ・ラツ）
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、垂戻。「亞刺比亞」

*台（タイ・ダイ）
臺
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ

*後（コウ・ゴ）
后
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ　オクル。
キミ。「皇后」

商（シヤウ・アキ）
アキナヒ。
モト、本。

壺（コ）
ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

姫（シン・キ）
ツ、シム。
ヒメ。

*托（タク）　拓ニ同ジ。オス、ヒラク。
*託（タク）　ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
*担（タン、ゲフ）　ハラフ。又アグ。
*擔（タン）　ニナフ、カツグ。
*攺（イ）　鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
*改（カイ）　アラタム。
*槍（サウ）　ヤリ。
*鎗（サウ）　鏘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。
*欠（ケン）　アクビ。「欠伸」
缺（ケツ）　カク。「缺席」
*糸（ベキ）　ホソイト、細絲。
*絲（ケツ）　イト。
*羨（イ）　支那ノ地名。
*羨（セン）　ウラヤム。

*虫（キ）　魚介類ノ總稱。又マムシ。
*蟲（チユウ）　ムシ。
*詫（タ）　ワビ、ワブ。「詫狀」
詫（タイ）　詑ニ同ジ。アザムク。
*諂（タン）　ヘツラフ。
*諂（タウ）　ウタガフ、疑。
*證（シヨウ）　アカシ、シルシ。「證明」
*証（セイ）　イサム、諫。
豐（レイ）　禮ノ古字。
豐（ホウ）　ユタカ。
*迄（キツ）　マデ。
*迠（セフ）　ユク、行。
*選（セン）　エラブ。（ヨリトル）
*撰（セン）　エラブ。（書物ヲ編纂ス）

*卻（ゲキ）　ヒマ、隙。
*卻（キヤク）　シリゾク。「退卻」
鍛（タン）　キタフ。「鍛錬」
鍛（カ）　シコロ、「鍛」

宛字（左のやうな字は假名を使用するがよい）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
せつかく　折角
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

昭和七年十一月二十日 初版印刷
昭和八年七月二十三日 訂正再版發行
昭和十二年十二月二十八日 訂正四版印刷
昭和十二年十二月二十八日 訂正四版發行

昭和七年十一月三日 初版發行
昭和十年九月十五日 訂正三版發行
昭和十二年十二月二十二日 訂正五版發行

昭和十六年九月三日 訂正七版印刷
昭和十六年九月七日 訂正七版發行

帝國實業讀本 改制新版
定價 卷二 金六拾錢

著作者 芳賀矢一
訂補者 上田萬年
長谷川福平

發行者 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者 大阪市西淀川區海老江上四丁目二十三番地
精版印刷株式會社
代表者 中井利正
(西大第七九)

發行所 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

(略名) 冨山芳賀賈國二

HAGA 芳賀 檢

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町2ノ9

広島大学図書
2000302773

資料室

375.9
Haf 芳賀矢一 編
帝國實業讀本 巻2-3 上田萬年,長谷川福平訂補
改正新版
東京 中等學校教科書株式會社 昭和16 訂正版
K41403 2冊 22cm
巻3 東京 富山房 昭和12 訂正6版

資料室

375.9
Haf 芳賀矢一 編
帝國實業讀本 巻2-3 上田萬年,長谷川福平訂補
改正新版
東京 中等學校教科書株式會社 昭和16 訂正版
K41403 2冊 22cm
巻3 東京 冨山房 昭和12 訂正6版

資料室

375.9
Hal 芳賀矢一 編
帝國實業讀本 巻2-3 上田萬年,長谷川福平訂補
改正新版
東京 中等學校教科書株式會社 昭和16 訂正7版
K41403 2冊 22cm
巻3 東京 冨山房 昭和12 訂正6版

資料室

375.9
Hal

芳賀矢一 編

帝國實業讀本 巻2-3 上田萬年,長谷川福平訂補

改正新版

東京 中等學校教科書株式會社 昭和16 訂正9版

K41403

2冊 22cm

巻3 東京 富山房 昭和12 訂正6版